HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『クリトン』を読む（上）
Author(s)	田中, 享英
Citation	北海道大學文學部紀要, 44(3), 1-61
Issue Date	1996-03-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33662
Type	departmental bulletin paper
File Information	44(3)_PR1-61.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

『クリトン』を読む（上）

田中享英

プラトンの『クリトン』は短い作品である。ステファヌス版プラトン全集のギリシャ語の原文では十一ページ。筑摩書房の世界文学全集にある田中美知太郎の邦訳でも十五ページに満たない。しかもその内容も、大筋としてはきわめて単純で、ソクラテスのことを親身に思う友人クリトンが牢獄にいるソクラテスを訪ね、かれに脱獄して亡命をするように説得を試み、逆にソクラテスによって、その計画を思い止まるように説得されてしまうという、ただそれだけの筋である。二人の会話はソクラテスが死刑になる二日前の早朝になされたことになっているが、それに費した時間は一時間か、あるいは長くても二時間はかからなかったろうと思われる。ほんの朝のうちに済んでしまった短い話し合いだったのである。

しかしその話し合いの中味は、どうして容易ならぬものを含んでいたと言わなければならないようである。というのは、この話し合いの結果、ソクラテスとクリトンはかれらの行動の方針を確認し決断したのだが、この決断と行動が、けっしてただこの二人の間にだけ起った事柄であるにとどまらず、その後の何世紀にもわたって、少なくともあ

る種のすぐれた人たちの行動と生き方を支配してきたからである。というのは、このときソクラテスは正義にしたがって生きかつ死ぬことを決断したのだが、このことがその後の時代の少からざる人々に正義の存在を信じさせ、かれと同じように生きかつ死ぬことを追い求めさせることになったからである。ソクラテスの生き方と死に方のどこにそのような力があるのか。その秘密が、この『クリトン』の、短い、二人のやりとりの中に秘められている。

私たちはこの秘密を解明したいと思う。ソクラテスの生と死は、かれと同時代の人々とその後の時代の人々に対する問いかけであったのと同様に、私たちに対しても問題を投げかけている。かれの生き方と死に方は正しかったのか、というのがその問題である。もっと具体的に言えば、ソクラテスはクリトンによる脱獄と亡命の勧めを断り、不正な判決であったにもかかわらず、国法に従って死刑になることを選んだのだが、それは正しかったのかという問題である。私たち個人は、どんなときにでも必ず、国家ないしは国法の命ずるところに従わなければならないのだろうか。たといその命令が間違っており、不正なものであっても、そうしなければならないのか。そのとき私たちは、そのことによって、却って不正を行うことになるのではないか。『クリトン』を読むと、こういった疑問が、私たちの心に雲のように湧いてくる。しかしまた同時に、それにもかかわらず、ソクラテスのあのような死は、私たちが否定しようもなく、見事であるとも思われる。このとき私たちがそれに感動するのは、かれの行動が正しかったか間違っていたかとは別に、かれが自分自身の信念に従って行動し死んでいった、まさにそのことに対してなのだろうか。しかし、ただそれだけのことであったのなら、ソクラテスの死はただの勇敢な若者の死とほとんど選ぶところがなくなるのではないだろうか。たしかにそのような若者の死も美しい。しかしそれだけのことだとしたら、人々が何世紀にもわたってソクラテスの名を不滅なものにしてきたことが、説明のつかないことになる。私たちにとってソクラテスの死が気

になるのは、かれの生と死の選び方になんらかの正しさと説得力があることを、私たちがどこかで感じとっているからではないか。ソクラテスが私たちにとって無視できない存在であり、問題であるというのは、そういうことであると思われる。

そうだとすれば、ソクラテスを理解するという仕事が、私たちに課せられていることになる。私たちはソクラテスの行動が私たち自身に無縁ではないことを感じている。つまり、早く言えば、私たちがもしソクラテスだったら、私たちもあのように行動しなければならなかったかもしれない、と私たちは感じる。だがいったいそんなことができるだろうか。少なくとも理由なしにはできるはずがない。しかもその理由が正しい理由であると、私たちが信じることができるのでなければならない。つまり、すべては、私たちが、ソクラテスがなぜあのように行動したか、その理由を理解できるか否かにかかっている。私たちがもし本当にソクラテスを理解することができるときが来るなら、そのとき私たちはかれと同じ行動をとることができるようになるかもしれない。しかし、もしかれを理解できないなら、かれは私たちとは無縁の人になり、私たちはかれを忘れることができるだろう。

ソクラテスがあのような行動を選んだ理由を、私たちは、『クリトン』の中で語るソクラテスの言葉から知ることができる。そこでのソクラテスの議論は、まさに、なぜかれがそのようにしなければならないかという理由を明らかにするためになされたものだからである。この場合、『クリトン』がソクラテス自身の著作ではなく、プラトンによる作品であるということは、私たちにとって全然障害にならない。この作品はプラトンの初期の作品であり、したがって歴史上のソクラテスをかなり忠実に伝えていると一般に信じられている。しかしそのことはともかく、かりにこれが完全にプラトンの創作であったとしても、私たちの探求には一向に差支えがない。なぜなら私たちにとって気になる

のは、まさにプラトンが伝えているソクラテスのことであり、まさに『クリトン』のソクラテスだからである。だから私たちには、まず始めに歴史上のソクラテスの実像を再構成し、その上でかれの行動の理解に取り掛かる、といった段取りはまったく不必要である。第一、そんなことをしたら、私たちにとって気になるソクラテスは幻であったということになって、どこかへ消えていってしまうかもしれないではないか。むしろ、プラトンのソクラテスが、私たちにとってはソクラテスの実像であって、それはすでに私たちの前にある。またソクラテスの行動の理由も、ソクラテス自身の口から、そこに語られている。

序　章　朝早くクリトンが牢獄のソクラテスを訪ねる（一～二節）

第一節　43a1―d6

ソクラテスの処刑の日が迫っていること　牢獄のソクラテスが朝早くふと目を覚ますと、傍らにクリトンが座っているのに気が付く、というところから二人の会話が始まる。クリトンがそんな時間にやって来たのは、デロス島のアポロンの祭りにアテネから派遣された船が帰ってくることを知らせるためである。というのは、その船が帰ってくる次の日に、ソクラテスの死刑が執行されることに決められていたからである。

それより三十日ほど前、ソクラテスはアテネの法廷へ訴えられ、裁判の結果、死刑の判決を受けた。罪状は「国家の認める神々を祭らずに他の新奇な神霊を信仰し、かつ若者を堕落させた」というものであった。しかしそれは無実

の罪であった。法廷でソクラテスはそのことを自ら弁明したが、判決は有罪かつ死刑という結果になった。弁明の内容は、たとえばプラトンの『ソクラテスの弁明』などから知ることができる。そこには、なぜかれがそのような嫌疑を掛けられるに至ったかという原因について、ソクラテス自身による説明が与えられている。これによれば、かれがアテネの人々と問答をし、かれらの徳について吟味したことが誤解されて、一部の人々の憎しみを買う結果になったのである。ソクラテスの問答は、もともと、人間はいかに生きるべきかということについての、問い手と答え手の共同の探究にほかならなかったのに、答えに詰まった人々は自分たちが侮辱されたと思い、問い手のソクラテスを憎むようになったのである。それがソクラテス告発の、遠い、しかし主要な原因だった。裁判におけるソクラテス自身による弁明は筋の通った立派なものであったし、またかれの友人たちも当然かれを助けるために力を尽くした。それにもかかわらず裁判の結果がこのようになったのは、ソクラテス自身の弁明があまりにも立派で、むしろ挑戦的でさえあったために、五〇〇人もの群衆から成る陪審員を感情的に走らせた結果であると考えられる。(その意味では、ソクラテスの弁明演説はきわめて拙劣であったと言わなければならない。しかし、さらにその裏を探れば、七十才になるソクラテスが意図的にそのような死にかたを選んだという疑いもないわけではない。)

ソクラテスの処刑は、たまたまデロス島のアポロンの祭りにぶつかったために、その神聖を汚(けが)さないためという理由でただちには執行されず、ほぼ三十日の間延期された。この期間をソクラテスはずっと牢獄につながれて過ごしたわけである。牢獄のかれのもとには毎日多くの友人たちが面会に訪れ、一日の大半を彼との対話に費やして帰っていった。(プラトン『パイドン』59d 参照)

ソクラテスが平静な様子であること　クリトンがこの朝ソクラテスを牢獄に訪ねたとき、眠っているソクラテスを直ぐに起こそうとしなかったのは、死刑執行の日がま近に迫っているというのに、ソクラテスの眠りの様子がいかにも安らかに見えたからである。ソクラテスには死を恐れている様子が少しもない。それはクリトンにとって驚きであった。こんな年――七十才――になって死を恐れるのはおかしなことだ、とソクラテスは言う。しかし、それは年齢だけで説明の付くことではない。人は年を取っても、命を惜しむからである。ソクラテスには普通の人間とは違ったところがある。それはいったいどこからくるのだろうか。ソクラテスにとって生と死はどういうものだったのか。クリトンはまた、これまでにもソクラテスの生涯を通じて、ソクラテスが幸福な性格の人間だと感心したことが何度もあると言っている。人がその性格のゆえに幸福であるというのは、いったいどういうことだろうか。死を前にして恐れることがなく、幸福さにおいて並ぶもののないソクラテス。その正体は何か。私たちにとっての最大のなぞ、私たちが一番たずね知りたいソクラテスの姿が、すでに早々とここに登場している。ここから後のかれとクリトンの対話のすべてが、このようなソクラテスを解き明かす手掛かりになるだろう。

もしも私たちがシニカルな人間だったら、このようなソクラテスは、私たちにとって謎でも何でもないと言おうとするだろう。要するにかれは変わり者だったのである。死の恐怖に関して鈍感で、「おめでたい」、異常な人間だったのである。ソクラテスなんか信じない、と私たちは言う。それでおしまいである。しかしもしも私たちがソクラテスを信じようとするなら――つまり私たちとかれとのあいだに共通点があることを感じ、かれの死が私たちの生と関わりがあると信じるなら、私たちはかれを理解しようとして探究を始めるだろう。どちらの道を選ぶかは、もちろん私たちの自由である。

クリトンは素直にソクラテスを信じ、かれを賛嘆の眼差しで眺めている。そもそもここにクリトンの言葉によって描かれているソクラテスは、クリトンの目に映ったソクラテスである。親しい友人の好意的な目に映るソクラテスの姿は、敵意ある人の目に映るソクラテスとは同じではないだろう。また無関心な人の目に映るそれとも違うだろう。しかし、だからといってクリトンの描くソクラテスを、私たちが疑う理由はない。むしろ友人を本当に知るのは友人ではないだろうか。なぜなら、友人は友愛のゆえに、友人をよく知ろうとするからである。信頼と愛情がなければ見えない、人の性格というものがあるのではないだろうか。クリトンはソクラテスを、これまでもいつもよく見ていたし、いまもその寝姿をじっと眺めていた。かれがソクラテスという人間を大きく見損なうとは思われない。私たちはソクラテスの平静さについてのクリトンの描写を信じてよいと思う。

第二節　43d7－44b4

夢の知らせ　クリトンが、デロス島からの船が今日にも帰って来るという知らせをソクラテスのもとに持ってきたのは、たまたま、その船の寄港したスーニオン岬で下船し、陸路で一足先にアテネに到着した人の話から推測してのことだった。ところがソクラテスは、船が帰ってくるのは今日ではないだろうと言う。なぜなら、かれは夢を見たからだ。夢に、一人の白い衣をまとった美しい女性が現われて、「そなたは三日目に豊かなプティエーに着くであろう」と言った、とソクラテスは言うのである。

女性がソクラテスに告げたという言葉は、ほとんどホメロスの叙事詩『イーリアス』の中の一句（IX363）をそのまま引用したもので、アキレウスが、自分の、故郷プティエーへの帰郷を予告する言葉である。とすれば、夢の意味は

明白で、ソクラテスが明日ではなくて明後日に、かれの魂の故郷であるあの世へ行くことになる、と告げているのである。

夢のお告げといったものを、ソクラテスがどこまで本気で信じていたかは、しょせん私たちには分からないことだし、またどうでも良いことだと思われる。また、この夢が結局のところ正夢であったか否かも、どうでも構わない。むしろ、私たちの興味をひくのは、この夢の全体を支配している明るさと、帰郷という希望に満ちた内容である。この明るい内容は、おそらく、間違いなくソクラテス自身に由来するものだろう。私たちも、思いがけない夢を見ることはある。しかし思い返してみれば、たいていは、平生の自分の生活の中に、何か心当たりがあるものだ。潜在的にそう思っていたことが夢に現われるのである。ソクラテスの夢はかれ自身が紡ぎ出した、かれ自身の作品だろう。つまりかれの死は、彼にとって、明るく希望に満ちた帰郷であると、彼自身が信じていたのである。私たちにとっては、まさにそれが謎であるのだけれども。

ソクラテスを脱獄亡命させるクリトンたちの計画　さて、クリトンが朝早くソクラテスを訪ねたのは、ソクラテスに死刑執行の時が迫っていることを知らせるためであったが、同時に、かねてから進めていたソクラテスの救出計画を、いよいよ決行する時が来たと判断したからである。ソクラテスを脱出させ国外へ逃亡させる計画はすでにもう準備ができており、ソクラテスさえ承知すればいつでも実行に移せるようになっていた。その試みがもう半ば成功していることを、プラトンは、すでにソクラテスとクリトンの最初の会話の中で、私たち読者に仄めかしていた。そこでは、まだ面会の許されないはずの早朝に、牢番がクリトンを黙って牢内に入れたことを、ソクラテスが訝しく思い、

クリトンがそれに答え、かねてからそれだけの鼻薬は嗅がせてあるのだと言っていた（43a5－8）。また、クリトンの後の言葉から知られるように、逃亡のための資金の用意も、すっかりできている。クリトン自身にもそのくらいの財力はあるが、シミアスがそのための金銭を用意してきており、ケベスも用意した。亡命先についても、しっかりした当てがある。テッタリアに、信用の置けるクリトンの知人がいるから、かれをたよって行けばいい（45a－c）。

ソクラテスが牢獄を脱出し国外に逃亡することが、ソクラテスが意志しさえすれば十分に可能であったという状況をいま確認しておくことは、これからの私たちの探求にとって本質的に重要である。というのは、私たちの問題は、なぜソクラテスが脱獄の勧めを拒否して、国法に従って死ぬことを選択したか、つまりソクラテスの行動の理由を解明することであるが、この問いが意味を持つためには、そもそも、ソクラテスにとって、生を選ぶことと死を選ぶこととのいずれもが、事実として可能であったのでなければならないからである。さもなければ――たとえば、脱獄することがソクラテスにとって絶対に不可能な状況にあったとしたら――ソクラテスが脱獄しないで死刑に服することを「選択」したとか、そのように「行動」したとか言っても、無意味なだけだろう。選択や行動は、選択や行動の自由を、言い換えれば、それをすることもしないこともできるという可能性を前提とするからである。しかし、ソクラテスの脱獄と亡命は、事実上、完全に可能であると考えられていた。プラトンはそのことを、牢番とクリトンの関係を描くことによって、私たち読者に、さり気なく、しかし明確に示している。

クリトンをはじめとする友人たちによるソクラテス救出計画は、決して実行困難なものではなく、準備はほとんど整っていた。ところが当人のソクラテス自身がこれに同意しなかったために、結局この計画は挫折することになる。しかし、このような計画を立てたこと自体は、クリトンやその他の友人たちにとって、おそらく、当然の行為であっ

た。そしてまた、おそらく一般のアテネ人たちにとっても、この企ては――もしもそれが実行されて、人々の話題になった場合だが――けっして非常識なものとは受け取られなかったはずである。政治的抗争が日常茶飯事であった当時のアテネでは、政治的な亡命は珍しくなかっただろうからである。ソクラテスの罪は、すでに見た告訴状から明らかなように、国家の宗教と教育にかかわる、いわば思想犯であった。これは、窃盗や殺人などの犯罪とは異なり、政治犯に近い。実際、ソクラテスが訴えられた背景には、かつてのかれの弟子であったことのあるクリティアスとアルキビアデスに対する政治抗争が、絡んでいたという見方もある。事が政敵の謀略、あるいはそれに伴なう個人的怨恨ということになれば、法廷での争いも、正義の問題を棚上げしたただの勢力争い、ないしは喧嘩と異なるところがない。それに敗れたからといって、むざむざ友人を見殺しにすることは、クリトンたちにすれば、敗北のうえに敗北を重ねることでしかない。ソクラテスの救出を、クリトンたちは、むしろ友人すなわち味方としての義務であると考えたに違いない。それはたしかに違法ではあったろうが、非道徳的とは考えられなかっただろう。現代の私たちの世界においてもまた、政治犯や思想犯の亡命はよく耳にする。暫くの間国外に難を逃れ、時期を待って帰国し、同胞の歓呼に迎えられたり、本人の名誉を回復するという話は珍しくない。クリトンたちの企ては、現代の世界に持ってきても、決して非常識なものではない。それは私たち自身でさえ、勇気さえあれば企てるかもしれないことなのである。

I　クリトンのソクラテスに対する説得（三〜五節）

第三節　44b5—d10

生命を救うための説得　クリトンは、ソクラテスの夢の話をほどほどに打ち切って、かれがソクラテスのもとへやってきた、本題の話を切り出す。「それはそうとして、今からでもぼくの言うことを聞いて、自分の生命を救うことをやってみないか。」クリトンたちのソクラテス救出計画はほとんど準備が整っていたが、肝心のソクラテス本人が、まだそれに同意していなかった。クリトンがこんな早朝に急いでやって来たのは、ソクラテスの救出のためにはもはや一刻をも争うと判断し、それを何としてでもソクラテスに承諾させなければならないと考えたからである。クリトンはソクラテスの説得に取り掛かる。

プラトンの『クリトン』には、見方によって、幾つもの主題があると考えられるが、それらの主題のうちの一つは「説得」であり、もう一つは「生命を救うこと」であろう。そのことを、プラトンは、クリトンのこの切り出しの言葉によって簡潔に予告しているように思われる。（「言うことを聞く」とは「説得されて、それに従う」ということである。）クリトンの説得はソクラテスの生命を救うためであるが、最後には逆にソクラテスがクリトンを説得して死を選んだかのように見える。『クリトン』は、その一部始終を述べたものにほかならない。人は行為を選択するに当って、結局のところ何者の説得に従うべきなのか。また、人は、いつどのようにして自分の生命を救うべきか。プラトンは

これら二つの主題を、『クリトン』全体を通して明らかにしてゆく。

説得とは、説いて納得させること、いいかえれば、よく話して分からせることである。何をか。ある言論とその論理をである。しかも、その言論を、ただ納得させ、分からせるのが目的ではなく、分からせた上で、何らかの行動に向かわせることを目的としている。つまり、簡単に言えば、相手に自分の言うことを聞かせることである。もし相手が、初めから自分の言うことを素直に聞いてくれれば、説得は必要がない。説得が必要になるのは、相手が自分と違った意見を持っていて、こちらの意見に従って行動することを承知しない場合である。そのとき、相手の意見を変えさせ、自分の意見に同意させるのが、説得の仕事である。クリトンはいま、この仕事に取り掛かろうとしている。

クリトンがソクラテスにかれを救出する計画の話を持ちかけたのは、いまが初めてではなかった。これまでにも、おそらく一度ならず、この話についてソクラテスの同意を求めたにもかかわらず、そのたびに断わられていたのである。そのことは二人のやりとりの言葉の端から明らかである。（「今からでもぼくの言うことを聞いてくれ」（44b6）「われわれが熱心に望んだにもかかわらず、きみのほうが出ていこうとしなかった」（44c3―5）「何度も同じことを言って、ぼくに是が非でも出て行かせようとするのはやめてくれ」（48e2―3）など。）クリトンもソクラテスも、このことに関して、それぞれ熟慮のうえで自分の行動の方針を判断し、選択してきた。その二人の判断と選択が、未だに一致に至っていないというのが、いまの事態なのである。それは二人の意見の不一致であり、考え方の違いにほかならない。

クリトンとソクラテスの意見の違い（その一）　クリトンは、どうしてもソクラテスの生命を救わなければならないと考えて、ソクラテスの説得を試みる。かれは先ず、ソクラテスに死なれてはクリトン自身が困るということを、

ソクラテスに訴える。もしそういうことになったら、クリトンはかけがえのない友を失うばかりでなく、世間の人たちからも良くは言われないだろう。なぜなら、本当の事情を知らない人々は、クリトンが金銭を惜しみさえしなければソクラテスを救い出すことができたのに、それをしないで友人を見捨てたと思うに違いないからである。世の人々から、友人よりも金銭を大事にしたと思われるほど恥ずかしいことがあるだろうか。これに対してソクラテスは言う。自分たちの行動が世間の大衆から誤解されるとしても、かれらの思わくを心配する必要はない。しかるべき人々であれば事実をありのままに受け取ってくれるであろうし、われわれが気にしなければならないのはこの人たちのことだけである、と。ここには、だれの言うことを気にしなければならないかについての、クリトンとソクラテスの意見の相違がある。

プラトンは、二人のこのやりとりにおいて、先に見た第一の主題である説得に関して、二人の考え方の違いを示していると見ることができるだろう。だれの言うことを気にするかということは、だれの言うことを気にして行動するかということである。したがってそれは、だれの言うことを聞くかというのに等しい。そしてこれは、言い換えれば、だれに説得されるかということである。(この問題は、さらに、以下の第六節から第八節までの議論に引き継がれることになる。)

クリトンがいま恐れているのは、もしかれがソクラテスを救出しなかったならば、世間の人々が、かれのことを守銭奴であり、友達甲斐のない人間だと思うだろうということである。そしてクリトンは、それを耐え難い恥辱であると考えているのである。私たちから見ると、このクリトンの心配には、もっともなところがあるように思われる。というのは、私たちも、世間に顔向けのできないような恥知らずなことは、したくないし、また、してはならないと考

えるからである。それは、少し古風な言い方をすれば、恥を知り、名誉を重んずべきであるという考えであり、もっと現代風に言えば、だれからも愛される人間になりたいという願望である。ところが、ソクラテスの方は、世間の大衆の思わくを気にする必要はまったくないと言うのである。そして、こちらの方の考え方も、私たちにはある程度理解できる。私たちも、名誉を追い求めるのはつまらない虚栄であり、他人の思わくや世間の評判を一々気にしていては何もできないと思う。となると、クリトンとソクラテスと、どちらの意見が正しいことになるのか。

ここで明確にしておかなければならないのは、ソクラテスがクリトンの意見のすべてを否定しているのではないということである。ソクラテスは、恥辱や不名誉を恐れるのは善くないことだとか、不必要なことだとか、言っているわけではない。また、他人の思わくや意見はすべて気にする必要がない、とも言っていない。ソクラテスが問題にしているのは、だれの前に恥じるかであり、だれの思わくと意見を気にするかという点である。そして、大衆に対してはそうする必要がなく、ただ本当に立派な優れた人たちに対してだけそのようにする必要があると言っている。

では、ここに言う大衆とはだれであり、優れた人たちとはだれか。クリトンは、自分たちの行動が、多くの人々から誤解されるであろうと言って、それを恐れている。これに対してソクラテスは、優れた人たちなら、どんな行動でも、それが事実行われた通りに分かってくれると言う。ここから言えば、大衆とは、事実について誤解するであろう——多数の——人々のことであり、優れた人々とは、真実を見る目を持っている——おそらくは少数の——人々のことである。クリトンは多数の人々を恐れ、その誤解を恐れる。ソクラテスは優れた人々と、その真実を畏れる。

ソクラテスの考えは、おそらくこうである。私たちが名誉を喜び、恥辱を恐れるのは、それらがそれぞれ、優れた行為と卑劣な行為に対して与えられるものであり、したがって私たち自身の徳と劣悪さの証しと考えられるからであ

る。しかし、そう考えられるためには、名誉や恥辱がだれから与えられるかが問題である。自分をよく知らない人たちから、勘違いや誤解に基づく、見当はずれの賞賛や非難を受けたとしても、それは名誉にも恥辱にもならない。したがってまた、何ら恐れるには及ばない。しかし、もしだれかある人が、ソクラテスとクリトンの行為を、事実ありのままに見て取り、ありのままに評価して、その上でかれらに名誉か恥辱かを与えるならば、それこそまさしく、かれらの行為と人柄が優れているか卑劣であるかの証拠になる。真実をありのままに見抜くことは、だれにもできることではなく、ただ優れた人たちだけにできることであるとすれば、われわれが気にしなければならないのはこの人たちがどう思うかだけであり、この人たちから与えられる評価だけである。

もっとも、私たちが名誉や恥辱や評判を気に掛けるのには、現実的にはもっと大きな理由がある。それは私たちが世間の人たちにどう思われるかによって、かれらから愛されることにも、憎まれることにもなるという点である。世間の人々が私たちのことを良く思うなら、かれらは私たちに好意と尊敬を寄せ、私たちによいことをしてくれるだろう。しかし、かれらが私たちを悪く思うようなことがあれば、そうはしてくれないばかりか、私たちに害悪を加えることさえありうる。しかもここでは、私たちが真実においてどのような人間であるかにはむしろ関わりなく、人々にどう思われるかによって、結果が決まるのである。クリトンは、自分が友人よりもお金を大事にしたと世間から思われることは不面目なことだと言ったが、そう言った時には、そこから結果する自分たちにとっての利害のことまでは、おそらく考えていなかっただろう。しかしソクラテスの方があまりにも、自分の身に降りかかっている現実から超然とした態度なので、クリトンも、世間の人への思われかたから生ずる結果のことを、持ち出さずにはいられなくなる。現にソクラテスの災難そのものが、アテネの人々によってもたらされたではないか、と。ところがソクラテスは、こ

の論点も、受けつけようとはしない。なぜなら、こんどは、不幸と幸福についてのかれの考えが、クリトンと違うからである。

クリトンとソクラテスの意見の違い（その二）　クリトンとソクラテスが意見を異にする第二の点は、かれらが何を最大の不幸と考えるかである。クリトンの意見では、大衆の思わくもあながち無視してはならない。もしかれらの間で中傷を受け、かれらに悪く思われれば、かれらは最大の害悪を加える力を持っているからである。現に、今度のソクラテスの事件がそのことを証明しているではないか、とクリトンは言う。しかしソクラテスはそうは考えない。大衆は最大の害悪をもたらす力を持っていない。もし持っていたら、それは却って望ましいことであろう。なぜなら、そのときかれらは、最大の善と幸福をもたらす力をも持つことになるはずだからである。ところが実際は、そのどちらも持たない。なぜなら、かれらは、人を賢くすることも、愚かにすることもできないからである。

クリトンの方は、ここで、ソクラテスの目を現実に向けさせようとしている。現にソクラテスは大衆の力を過少評価し、かれらの機嫌を取らなかったばかりに、死刑という最大の害悪を被ることになったということを、ソクラテスに認識させようとしているのである。ところがソクラテスの方はそれを認めない。もちろんかれは、大衆がかれに死刑の判決をもたらしたことは認めている。にもかかわらず、大衆がかれに最大の害悪をもたらしたことを、ソクラテスは否定するのである。それは、かれにとっては、死が最大の害悪ではないからである。ここにクリトンとソクラテスの意見の、もう一つの違いがある。これは、言い換えれば、死についての意見の違いであり、したがって生についての意見の違いであり、したがってまた、生命を救われることについての意見の相違である。こうして、この論点は、

私たちが先に見た第二の主題に関わることになる。（この問題は、後に第八節に再び現れる。）

ソクラテスの、死についての意見は右の通りだが、さらにかれは「大衆」について、かれらはそもそも最大の善福をも、最大の害悪をも、作り出す力がないと言い、その理由として、大衆は人を賢くすることも愚かにすることもできないからだと言う。ソクラテスがここで考えていることは、まず第一に、人間にとって最大の幸福は人が賢くなることによって得られ、最大の不幸は愚かさから生まれるということであり、第二に、大衆には人を賢くしたり愚かにしたりする力がないということである。

第一の、最大の幸福が賢さによって得られるということは、おそらく、幸福とはどのようなものであり、どのように生きることが幸福であるかを「知っている」ことによって、はじめてそのように行為し、幸福に生きることができるということだろう。そして、最大の不幸が愚かさから生ずるということは、幸福について「知らない」ために、幸福とは反対の行為をしてしまうことだろう。したがって、人は、幸福についての知恵という、同じ一つのものを持つか持たないかによって、幸福になったり不幸になったりする、というのである。しかも、ソクラテスによれば、このときの最大の不幸とは死刑にされるというようなことではないから、最大の幸福についての知恵も、死刑を逃れるための知恵といったものとは違って、なにか自分自身の生き方と行為を正しくすることに関わる知恵のことを考えていると思われる。

そして第二の、大衆が人を賢くすることも愚かにすることもないというのは、大衆は、たしかに、多数の力によって、人の財産を没収したり、国外に追放したり、果ては死刑にしたりはするだろうが、そういったことによって、人を賢くしたり愚かなものにすることはできないということだろう。かれらには、いま上に言われたような、幸福にか

かわる知恵を与える力も奪う力もない。大衆は、群衆という形では、そのひとりひとりの構成員である個人とは異なり、定まった見識を持つことがなく、政治家やマスコミにたやすく煽動されて、右へ左へとそのつど意見を変える。いわゆる群集心理である。大衆が、人に知恵を与えたり知恵から遠ざけたりする力を持たないのは、大衆自身にも定まった見識ないしは知恵がないからである。ソクラテスが嘆いて言っていたことの意味は、もしかれらが幸福についての知恵を持っていたなら、人をそのような知恵から遠ざけることによって、最大の害悪を与えることができたであろうが、同時に、その同じ、幸福についての知恵によって、人にその知恵を与え、最大の善と幸福をもたらすこともできたであろうに、ということだろう。

さてしかし、ここでのソクラテスとクリトンのやりとりでは、二人のあいだの食い違いだけが目立ち、これらの食い違いが二人の考えのどういう違いから出てきたのか、そしてどこにどうすれば二人の考えの一致点を見つけることができるかは、私たち読者にはまだ分からない。私たちはゆっくり腰を据えて、これからの二人の対話の成り行きを見守らなければならない。

第四節　44e1―45c4

救出の実行手段について　クリトンのソクラテス説得の試みは、その出だしのところで、いきなり二人の考え方の違いが現われ、話の歯車がうまく嚙み合わなかった。クリトンが、世間の人たちから誤解されるだろうと言えば、ソクラテスは、どう思われてもよいではないかと、取り合わないし、クリトンが、そうは言っても世間の人々の意見が大きな力を持つことだってあるのだと言えば、ソクラテスは、本当にそうだといいのだがと、はぐらかす。二人は、

どうやら話の前提のところで、考えが食い違っているらしい。しかしクリトンにとって、そのような原理的で抽象的な議論は苦手であるし、今のかれには、そんなところで理屈にこだわっている暇は無い。そこでクリトンは話題を変え、ソクラテス救出の具体的な手段について、そこに障害となることはなにもなく、実行が十分に可能であるということを、細かい点にわたって、熱心に説明し始める。これが、クリトンのソクラテスに対する説得の、第二の論点になる。

クリトンがまず取り除こうと試みるソクラテスの心配は、ソクラテスの脱獄亡命が、クリトンを始めとしてかれの友人たちに多少の迷惑を掛けるかもしれないという点についてである。脱獄は国家に対する犯罪であり、したがって脱獄の手引きもまた同じく犯罪である。となれば、国外に脱出してしまうソクラテスはともかく、その手引きをしたクリトンたちに対しては、全財産の没収、あるいはそれよりさらに重い刑罰が課せられることが予想される。しかしクリトンは、そのくらいの危険を冒すのは友達として当然の義務だと言う。しかもそのような危険も、金銭によって回避することが可能であることを、クリトンは指摘する。クリトンたちに対する告発者を買収することができるからである。また、国外逃亡となれば、そのための資金が必要になるが、その準備もある。ソクラテスを脱出させ護送する人員のための費用は、おそらくクリトン一人でも賄うことができようが、シミアスやケベスが、すでにその用意をしている。さらに、ソクラテスは外国生活を送ることには気が進まないらしいが、亡命先の生活についてもまったく心配する必要がないことを、クリトンは力説する。

クリトンのこの説得は、ソクラテスが脱獄亡命計画に同意しない理由が、もしも、行為そのものの是非ではなく、その行為の実行に伴なう友人たちの犠牲や、その他の付随的な心配事にあるのならば、予めそれを取り除いておこう

という、いわば搦め手からの説得である。ソクラテス本人がその気になりさえすれば、他のことは何一つ心配しなくてよいのだから、とにかく決断してほしい、とクリトンは言っているのである。

もちろん、このような、行為の手段についての議論は、目的とする行為そのものが望ましいものであるという前提があって初めて意味を持つ。ある行為を実行するかしないかを決断するに当たって、それを実行した場合の犠牲が軽微であるか重大であるかが問題になるのは、そもそもその行為が少しでも望ましいことがはっきりしているときであって、その行為が少しも望ましいと思われないのにそのようなことが問題にされることはない。その意味で、クリトンのこの論点はあくまでも付随的ないしは二次的な論点である。（このことはクリトン自身も、ソクラテスも、認識している。クリトンは、ソクラテス救出の積極的理由として、ソクラテスがこのまま牢獄にとどまって死刑にされてしまうことは、災難であるばかりでなく恥辱でさえあるのだから、正しいことではないという論点を、いまの議論に続けて提出しているし、ソクラテスは、第一に考えなければならないのは行為そのものが正義にかなっているか不正であるかであると、後で繰り返し述べることになる（特に 48c－d, 54b2－4）。）しかし、だからといってこのような手段の問題が重要でないということはない。行為がそれ自体としては望ましいと思われても、その実行に伴なう犠牲があまりに大きい場合には、それを思い止まらなければならないということが、現実にはある。いまの場合も、ソクラテスが友達思いの人間であって、自分が救出されること自体には異存がなくても、それが友人たちに累を及ぼす恐れがあるばかりに実行に踏み切れないのかもしれないということは、クリトン自身が友人思いの人間であるだけに、クリトンからすれば十分想像できることだったのである。実際には、ソクラテスが脱出計画に反対した第一の理由はそのことではなかったけれども、そのこともたしかに大きな理由になり得ることを、ソクラテスは素直に認めている（45

a4、53b1－3)。この点で、クリトンの説得は、誠意ある、配慮の行き届いた説得であったと言うべきだろう。

第五節　45c5－46a8

クリトンの倫理　クリトンの説得の最後の、第三の論点は、ソクラテスがこのまま牢獄で死を待つことは、「正しい」行為ではないという主張である。クリトンがすでに説明したように、ソクラテスの救出は十分に可能である。それなのにその実行をあきらめてしまうのは、自分で自分を見捨てる行為である。そのように敵のなすがままになるのは、自分から敵に手を貸すようなものである。しかもそれは、自分だけではなく、自分の子供達をも見捨てることであり、保護者としての義務を放棄することにもなる。ソクラテスがこのまま殺されてしまうことは、ソクラテス自身にとっての不幸であることは言うまでもないが、それだけでなく、恥辱でさえある。なぜなら、自分で自分の身を守ることもできず、また自分の保護を必要としている身内の者を守ることもできないのは、一人前の男としてあまりにも腑甲斐ないからである。少しでも勇気があって、少しでも有能なところがある人間だったら、簡単にそんな目に遭うはずがない。

クリトンはここで、前節とは論点を変えて、ソクラテスの行為そのものに批判を向けている。そして、このまま死刑にされるというソクラテスの選択を、何としてでも改めさせようと、説得に全力を尽くす。ソクラテスの行為に対するこの批判は、いうまでもなく、同時に、どのように行為すべきかについての、クリトン自身の考え方の主張にもなっている。かれがソクラテスの行為を「正しくない」(45c5)と言って非難するとき、この非難は、どういう行為が「正しい」かについての、クリトン自身の考えにもとづいている。それはすなわち、かれの価値観であり、かれの生き

方であり、その意味で、クリトンの倫理である。

クリトンの考え方について、かれのここでの言葉づかいから分ることは、かれが、少なくともここでは、何よりも「男らしさ」（45d7）という「徳」（45d8）を価値あるものと考えていることである。それは、言い換えれば「勇気」であり、最も典型的には、戦場において敵とわたりあうときに発揮される徳であって、自分自身を守り、自分の味方を守り、そして敵を打ち負かす、意欲と能力を意味する。もちろん、クリトンは武人ではないから、戦（いくさ）の話をしているわけではない。しかし戦争がなくても、仕事の場において、私生活において、そして時には法廷において、しかも、男にかぎらず女であっても、さまざまな敵と戦わなくてはならないことがある。そのとき、戦いに立ち向かうだけの勇気と力をもたず、弱気と無能のゆえに、相手から不正に危害を加えられながら手も足も出すことができないということがある。クリトンが「男らしくない」（45e2, 6）とか「無能」（45e6）とかいう言葉で言っているのは、そういう事態のことにほかならない。ひとから害悪を加えられ、不正なことをされることは、「不幸」（46a3）であるばかりでなく、「恥辱」（45e1, 46a3）でさえある、というのがかれの考えである。

いまの私たちにとって何よりも必要で肝腎なことは、このクリトンの倫理が、私たち自身の倫理にどれほど近いものであるかを、はっきりと認識しておくことである。クリトンのこの倫理は、結局のところ、ソクラテスによって論駁されることになる。クリトンはソクラテスを説得することに失敗し、かえってソクラテスがクリトンを説得して、二人の会話が終る。これが『クリトン』というドラマの筋書きである。このとき、もしもクリトンの倫理が私たちの倫理とまったく異質なものであれば、ソクラテスとクリトンの会話は私たちにとっては他人事（ひとごと）であり、私たちには関係のない、二人の間だけの話として忘れてしまうことができるだろう。しかし、もしも私たちの倫理がクリトンの倫

理と何らか一致するところがあるならば、私たち自身の倫理もソクラテスからの論駁を受けざるをえないことになる。そして、クリトンと共に私たちも、ソクラテスによって説得されることになれば、私たちは私たち自身の倫理を変革しなければならなくなる。こうして、クリトンとソクラテスの間の対話のこれからの成り行きが、私たち自身の倫理ないしは生き方と無縁ではないことになる。

私たちの倫理がクリトンの倫理とどこまで同じであるかは、おそらく、一概には論じられないことだろう。私たちとクリトンとでは、生きている時代も社会も異なっている。また、私たち一人一人のあいだの差異もある。しかし少なくとも、私たちの多くは、ソクラテスの態度に対して、クリトンが感じたのと同じ疑問を感じるのではないだろうか。私たちの目にも、ソクラテスは、あまりにも簡単に、自分から、生きることを放棄し、子供達を守ってやることをあきらめてしまっているように見えないだろうか。もし私たちがソクラテスの立場にいたなら、そしてもしかれのように何もできずに死んでいかなければならないとしたら、私たちは自分があまりにも情ない人間だと思うだろう。もしそれが、何かほかの目的のためであり、何かのために自分自身を犠牲にするというのなら、あながち分からないではない。しかし、今の場合、ソクラテスの犠牲が何かの役に立つとは思えない。それは単に戦いの放棄であり、クリトンが言っているように、敵の思うままになるだけのことであるように見える。

しかも、ソクラテスの方に、遠慮しなければならない筋合いはない。もともとかれが法廷に訴えられた理由からして、無実のことであり、それに続く裁判も判決も、不当なものであった。つまり、不正なことをしたのは、ソクラテスを訴えたほうの側の人間であり、かれを有罪にしたアテネの大衆だったのである。だとすれば、ソクラテスがいま黙って死んで行くことは、無意味であるばかりか、かえって不正を追認しその手助けをすることにさえなるのではな

いだろうか。また、かりに百歩譲って、ソクラテスが有罪であることを認めたとしても、前にも触れたように、その罪は、思想犯ないしは政治犯のそれであるだろう。そして、そうだとすれば、亡命はむしろ当然の対抗手段であると、私たちには思われる。

もし私たちがこのように感じるとすれば、クリトンの倫理は私たちの倫理とそれほど隔たったものではないことになる。私たちがクリトンの言葉に共感を覚え、かれの言うことが常識にかなっていると思うのは、クリトンの倫理が、私たちの生きている日常の倫理に一致しているからにほかならない。たしかに私たちは、いま、ソクラテスの立場にはいない。法廷に立たされたわけでもなければ、死刑の判決を受けて牢獄に繋がれているわけでもない。だから、脱獄も亡命も問題にならない。しかし、私たちも社会の中に生きており、したがってまたさまざまな「社会悪」にさらされて生きている。そこには貧富の差があるし、その他のさまざまな不平等がある。私たちは必ずしも、自分が社会から公正な取扱いを受けているとは考えていない。あるいはむしろ、少なからざる不正を被っていると考えることがある。とすれば、ここから、私たちはクリトンと同じ考えをもつことになるのではないか。不正を身に受けながら何の抵抗もできず、相手の言いなりになることは、不幸なことであり、恥でさえある、と。私たちは、世の中の不正と戦い、自分たちの「権利」を守ることが正義であると考えていないだろうか。私たちの親たちも、マスコミも、そして学校の先生たちも、私たちにそのように教えてきたのではなかったか。

ソクラテスはクリトンの倫理を論駁する。ところがそのクリトンの倫理は、私たちの倫理にかなり近いものである。となると、私たちはクリトンの倫理の運命に無関心ではいられないことになる。クリトンの倫理が否定されなければならないとしたら、それのいったいどこがどのように間違っているというのか。ソクラテスは、それに対していった

いどのような倫理を対立させようとしているのか。その理由は何であり、根拠は何なのか。いや、そもそもクリトンの倫理の正体は何であるか。そして、これに対立するソクラテスの倫理の正体は何であるか。この問題が、これから『クリトン』を読みすすめていく私たちにとって、私たち自身の問題になる。

II　ソクラテスのクリトンに対する説得　（六〜十七節）

II—1　行為の原則について　（六〜八節）

第六節　46b1—47a12

ソクラテスは言論に従うこと　クリトンは、ソクラテスがこのまま牢獄にとどまって死を待とうとするのは正しいことではなく、むしろ牢獄を脱出して外国へ亡命すべきだと考え、ソクラテスがこれに同意するように、熱心に説得を試みてきた。しかし、この説得は正しいのだろうか。この説得のもとにある、クリトンの考えは正しいだろうか。

クリトンの説得を聞き終えて、ソクラテスは言う。クリトンの熱意は、それが正しい考えにもとづくものならば大きな価値がある。けれども、そうでなければ、熱意が大きければ大きいだけ、却って厄介をひきおこすことがある。だから、まず、クリトンの考えが正しいかどうかを調べてみなければならない、と。

クリトンの熱意あふれる説得が、友達を思う誠意からのものであることは、ソクラテスには十分にわかっていた。それに対する感謝の気持ちを、ソクラテスは、クリトンへの親しみを込めた呼び掛けで表わしている。しかし、ソク

ラテスとしては、ただちにこれに同意することはできない。なぜなら、もしクリトンの説得が間違った考えにもとづいているとしたら、それに従うことによって却って、ソクラテスもクリトンも行動を誤ることになるからである。しかもそのとき、クリトンの「熱意が大きければ大きいだけ」(46b2)、かれの説得は、無益であるどころか、有害なものになってしまう、とソクラテスは言う。なぜなら、それだけ大きく、誤った方向へ踏み出してしまうことになり、損害も大きくなるからである。それはちょうど、足の速い人や力の強い人がその方向を誤ったときに、それだけ一そう被害を大きくするのに似ているだろう。だから、クリトンの考えが正しいかどうかを、まず調べてみなければならない。そういうわけで、ソクラテスは、どのように行為すべきかについてのクリトンの言論についての考察にとりかかることになる。もちろん、クリトンの言っていたことが正しければかれの説得に従うけれども、そうでなければ従わないというのが、ソクラテスの考えである。

すでに見たように、クリトンはこれまでにもたびたびソクラテスに脱獄を承知するように勧めてきた。しかしソクラテスは、いままで、それに従うことを拒否してきた。それは、ソクラテスが友人たちの好意を無視したということではない。ソクラテスの身の処し方について、ソクラテスにはソクラテスの考えがあったからであり(cf. 45a4－5)、それがクリトンたちの考えと一致しなかったためである。クリトンたちの説得が筋道の通った正しいものであれば、ソクラテスもそれに従う用意がある。そのことは、いま、ソクラテスが、クリトンの言うことが正しいかどうかを、クリトンと「一緒に調べてみよう」(46b3)と言っていることからも、明らかである。ソクラテスは、正しい説得に従うということを何よりも大事なことと考えているのである。調べた結果、クリトンの言うことが正しくないことが明らかになるということも、もちろんあり得る。そのときには、ソクラテスはクリトンの説得に従わないことになる。

しかし、このときでも、ソクラテスは、クリトンを説得するということを重視する。クリトンが言っていたことが正しくなかったということが、共同の考察によって明らかになったとすれば、その考察は、そのまま、クリトンの考えに対する「論駁」になるだろう。そして、ソクラテスの考えがもともとクリトンと正反対だったとすれば、この論駁がそのままソクラテスの考えの正しさの「証明」になるだろう。しかし、この反駁も証明も、ソクラテスとクリトンとの共同の考察として、つまり終始ソクラテスがクリトンの同意を確かめながら、ソクラテスのクリトンに対する「説得」として、進められることになるのである。(cf. 48e, 49d—e, 54d)

説得を大切にするということは、言論を大切にするということである。なぜなら、説得するということは、言論に従わせることであり、説得されるということは、言論に従うことだからである。ソクラテスは、いま、明確に宣言する。自分という人間は、いつも「言論に従って」(46b5) 行動する者である。それは今に始まったことではなく、つねにそうであったことだが、自分は、自分のうちにある他の何ものにも従わないで、つねにただ、そのつど自分で論理をたどってみて最善であるということが明らかになった言論にのみ従う、とソクラテスは言う。したがって、かれは、以前から自分が語りつづけてきたいくつかの言論を、今このような運命が降りかかってきたからといって、捨て去るわけにはいかない。それらは今でもそのまま同じ姿で現れているのだから、前と同じそれらの言論をかれは尊重し、信奉する。クリトンとソクラテスが、いま、それらよりも優れた言論を見つけだすことができないならば、かれはクリトンの勧めにも従うつもりはない。また、多数の人たちが、言論によってではなく力によって、いま以上の身柄の拘束や、死刑や、財産の没収などをもってわれわれを脅迫するとしても、譲歩はしない、とソクラテスは言うのである。

ソクラテスはここで「言論に従う」と言っているが、それはどういうことだろう。「言論」とは、だれの、どんな言論のことだろう。まず、ソクラテスが「自分のうちにある他の何ものにも従わずに、言論に従う」（46b5）と言っているのは、なによりもまず、自分のうちにある欲望や恐怖などの感情に動かされないという意味だろう。このことは、かれが、いまよりももっと多くの脅しをかけられても譲歩しないと言っていることからも分かる。脅しによって動かされるというのは、恐怖によって動かされるということだからだ。そうすると、言論に従うというのは、私たちの使い慣れている言葉で言えば、感情に従わないで理性に従うというのに近いと思われる。しかもそれは、自分自身の理性に従うことであるように思われる。ソクラテスは「そのつど自分で論理をたどってみて、最善であるということが明らかになった言論に従う」（46b5－6）と言っているからである。

しかし、ソクラテスの、「言論に従う」という言い方は、「理性に従う」という言い方よりももっと具体的であり、それだけ明確であるように思われる。いったい、自分の理性に従うとはどういうことだろうか。自分の冷静な考えどおりに行動することだろうか。だが、もしそれだけのことなら、自分の感情や欲望に従って考え、その考えにしたがって行動することだってあるだろう。たとえば、ソクラテスが死を恐れ、それを逃れたいと考え、そのための綿密な脱獄計画を立て、これを冷静に――つまり「理性的」に――実行したとしたらどうか。そのような場合でも、理性に従っていることになるのか。また、理性は私たちのだれにでもそなわっていて、ひとはその気になりさえすれば、いつでも、だれでも、理性に従うことができるのか。何が善いことで何が悪いことかについて誤った考えをもった人でも、そうすることができるか。こう考えてみると、理性に従うとはどういうことかは、案外分かりにくい。これに対して、ソクラテスが「言論」に従うと言うとき、かれはそれを、もっと具体的な、現実の言葉に従うこととして考えている。

というのは、ここでかれは、ほとんど、「以前からぼくが語ってきたいくつかの言論」(46b6－7)のことを言っているからである。それは、「いまも前と同じ姿でぼくに現れている」(46b8)と言われ、「今この場でそれらよりももっと善い言論をわれわれが語ることができないならば」(46c2)と言われている、まさにそれらの言論のことである。つまりソクラテスは、すでに以前から自分の言論というものを持っており、それらを何度も語ってきた。その同じ言論に、今も従うと言っているのである。

ソクラテスはそれらの言論を、以前と同様に今も、「尊重し」(46c1)、「敬意を払っている」(46c1)と言う。しかしそのことは、かれが他人の言論を顧みず、自分の言論にだけ頑固に固執しつづけるという意味ではない。もしそうなら、それは却って言論に従わないことになるだろう。言論はなんらか共通なものでなければならないからである。ソクラテスは、「そのつど論理をたどってみて、最善であるということが明らかになった言論に従う」のであるから、これまでの言論よりも善い言論を発見することができれば、かりにそれが他人からの説得によるものであっても、かれはそれに従う用意がある。だが、そのようなものが現われない限りは、以前から語り続けてきた言論に従うほかはない。ソクラテスが言おうとしているのは、ただ、言論以外の何ものにも従うつもりがないということである。いまクリトンは、ソクラテスの言論に対立する言論を持ち出して、ソクラテスを説得しようと試みている。このときソクラテスにとって意味があるのは、そのクリトンの言論が言論として正しいかどうかだけである。いまもしソクラテスが言論の正しさをうやむやにしてクリトンの説得に従うなら、たしかにかれは死刑を逃れ、生き長らえることができるだろう。しかし、それが正しい言論に反することだとすると、ソクラテスはなにか言論以外のものに従うことになり、言論を捨て去ることになる。

そのときかれは、かれの言論を放棄するとともに、言論に従うという生き方そのものをも放棄することになる。それは、ソクラテスにとっては、自らの生涯を無きものにするに等しいだろう。それも、これまでの生涯をさかのぼって、その全部をひっくるめて、かれが生きていたことの全体をどぶに捨ててしまうことになるのである。なぜなら、かれにとって「生きる」ということは「正しい言論に従って生きる」ことであり、生涯を通じてただそのようにのみ生きてきたからである。かれがアテネの人々との対話を通して、正しい言論を探求しつづけてきたのも、そのためにほかならなかった。そのかれが、いまになって言論を捨て去るとしたら、これまでのかれの生活はいったい何であったことになるのか。かれのこれまでのすべての議論は、「ただの議論のために、空しく語られた、冗談であり、無駄口だった」（46d3－4）ことになるほかはないだろう。そしてそれと同時に、その瞬間に、ソクラテスの生涯は単なる冗談として――つまりまったく無意味であったものとして――雲散霧消するのである。ソクラテスが「いままで口にしてきた言論を、いまさら放棄するわけにはいかない」（46b6－7）のは、まさにこの理由による。

ソクラテスは、つねに自分の言論と言えるものを持ち、それに従って生きようとしている。これは言い換えれば、かれが確固とした自分の生き方を持って生きてきたということである。一般に、見識があると言われる人々は、みなそのように生きている。しかしソクラテスの場合は、それが徹底している。つまりかれは、自分の生き方をつねに言論として表現し、それが言論として正しいか正しくないかを調べることをもって自分の生活としてきた。言わば、言論を自分の仕事としてきたのである。このようなソクラテスの生き方は、異常とまでは言えないにしても、かなり特別な生き方であることは認めなければならないだろう。このような生き方を、私たちは自分の生き方とすることができるか。私たちがソクラテスを理解できるかできないかは、このことに懸かっている。

行為の原則にかかわる基本的言論　いまソクラテスは、クリトンと共に、クリトンの説得が正しいかどうかを調べてみるという仕事にとりかかろうとしている。それは言い換えれば、クリトンの言うようなこと、つまり脱獄と亡命を、なすべきか否かについて考察することである。では、その考察はどのようにすればよいか。

言論に従う、というのがソクラテスのやり方である。しかしそれは、もちろん、クリトンの言論にそのまま従うということではない。クリトンの説得も、言論である。だから、もしそれが正しい説得であれば、ソクラテスもそれに従うつもりである。しかし、まさに、それが言論として正しいかどうかが問題なのである。正しい言論でなければ、言論として成り立っているとは言えない。

正しい言論とは、ソクラテスが言っているように、「自分で論理をたどってみて最善であることが明らかになった言論」(46b5－6)のことである。言論には「論理」というものがある。それは言い換えれば、言論の筋道、言論と言論のつながり、あるいは一貫性ということである。その筋道が一貫して通っているものが正しい言論であり、言論として成立するものである。いま、問題は、クリトンの、「ソクラテスは脱獄亡命すべきである」という、当面の行為にかかわる言論である。だがこの言論だけをいくら見詰めていても、これが正しい言論であるか否かを知ることはできない。それが分かるためには、この言論と他の言論との関係を調べなければならない。つまり、この言論よりももっと基本的な言論に目を向け、その言論といまの言論が論理的に調和するかどうかを調べるのである。そして、その基本的な言論に調和すれば、当の言論は正しく、調和しない言論は正しくないことになる。言論の正しさを調べるということは、そのつながりを調べることである。

だが、このような考察が成立するためには、それに先立って、この考察の基準となる何らかの基本的な言論が、しっ

かりと、真直ぐに、正しく立てられていなければならない。それがあって初めて、他の言論が真直ぐであるか曲っているかを、これに照らして知ることができるからである。基本的な言論というのは、言い換えれば、生き方の原理であり、行為の一般的な原則のことである。このように言ってしまうといかにも厳めしく聞こえるが、実は私たちのだれもが、多かれ少なかれ、そのような原則を持っており、それに従って生きている。つまり、私たちは無意識に生きているわけではなくて、日常の一つ一つの行為をなんらかの考えにもとづいて行っている。その考えが、行為の原則であり、生き方の原理である。この原則についての考えを、私たちは正しく考えることもあれば、誤ることもある。そして、正しい原則に従えば、よい生き方をすることができ、誤った原則に従うときは、悪い生き方をすることになる。これらの原則は、言論として言い表わされる。したがって、この基本的言論にも、正しい言論と、そうでない言論があることになる。

ソクラテスが「以前からぼくが語ってきたいくつかの言論」（46b6－7）とここで言っているのは、まさにこのような、行為の原則を言い表わす基本的な言論のことであると思われる。後のほうで語られていること（53c6－8）からも分かるように、ソクラテスはこれまでの生涯を問答に捧げてきた。「人間にとって最大の価値を持つものは徳であり、正義である」（53c7）といった言論や、その他の、人間の生と幸福にとって基本的な言論の正しさを、人々との問答によって確かめつづけることを、かれは自分の仕事としてきた。

そしていま、ソクラテスは、クリトンがかれに説得しようとしている、「脱獄亡命すべきである」という、当面の行為にかかわる言論は、正しい言論ではないと考えている。その根拠は、おそらく、この言論が、ソクラテスがこれまでに確証してきた基本的な言論と一致しないというところにある。言い換えれば、ソクラテスの基本的言論から論理

的に導き出される結論は、「脱獄亡命すべきではない」という言論であって、クリトンの言論はこれと矛盾するのである。

だから、いまもしソクラテスがクリトンの説得を受け入れるなら、ソクラテスは、かれがこれまでに語ってきた基本的言論を放棄することになるだろう。ところが、いまのところ、ソクラテスの方には、それらを放棄すべき理由がない。つまり、それを否定し、それらに代わる、もっと善い言論を見出だささないのである。そこでソクラテスは、そこのところをもう一度一緒に考えてみようと、クリトンに提案する（46d4－7）。すなわちソクラテスは、まず初めに行為の原則にかかわる基本的な言論について、二人が一致して同意できるところを探し出そうとしているのである。その実際の手続きとしては、ソクラテスがこれまでに語ってきた幾つかの基本的言論について、それが正しいか否かをもう一度検討し直すという作業になる。基本的言論について二人の一致点を見出すことができれば、そこを基準に、そこから出発して、いままさに問題になっている行動を実行すべきか否かを見出すことができるだろう。

そういうわけで、ソクラテスとクリトンにとって、調べてみなければならないことは二つあることになる。その第一は、行為の原則にかかわる基本的言論として、正しい言論は何か、ということ。そして第二は、この基本的言論に照らしてみるとき、クリトンの、「ソクラテスは脱獄亡命すべきである」という言論は、正しい言論となるか、それとも正しくないことになるか、というものである。このうち、第一の、行為の原則についての問題は、第六節から第十節まで、第二の、脱獄亡命という行為についての問題は、第十一節から第十六節までにおいて考察されることになる。

人々の意見についての言論　ソクラテスとクリトンがいま当面している問題について、二人の共同の考察を始め

るにあたって、ソクラテスはまず、かれ自身がこれまでに確認してきたいくつかの基本的言論のうちからその一つを選び出す。そして、その言論の真理が今も不変であるかどうかについて、クリトンの考えを聞きただす。その言論とは、「人々の意見は、そのすべてを気にするべきではなく、そのうちのあるものは尊重すべきであるが、あるものは尊重すべきではない」というものである。これは、もう少し丁寧に表現すれば、「世間の人々が思うことや、かれらに思われること、つまりかれらの意見や批評やかれらの間での評判は、そのすべてが尊重に値するわけではなく、その中にはわれわれが顧慮すべきものと顧慮すべきでないものとがある。われわれは、すべての人の意見を気にすべきではなく、ある人々の意見は重んずべきであるが、ある人々の意見は重んずべきではない」という言論であり、ソクラテスはクリトンに、この言論が正しいか正しくないかを問うのである。

ソクラテスがこの言論を初めに取り上げた理由は、少し前の対話で、クリトンが世間の人々の思わくを気にしていたからである。クリトンは、もしソクラテスを救い出さなかったならば、世間の人々は自分のことを、友達よりもお金を大事にする人間であると思うだろうと言い、それを恐れていた(44b9－c5)。また、多数の人々の意見に注意しないと、大きな災難を招くことがあるとも、言っていた(44d1－5)。それでソクラテスは、その問題をもう一度取り上げて、ここから考察を始めようとしているのである。

ソクラテスの考えでは、この問題は、行為の原則にかかわる。おそらく、この基本的なところで、ソクラテスとクリトンの意見が喰い違っているのである。かれら二人が、だれの意見を気にすべきかに関して、また何を最大の災難であり不幸であると考えるかに関して、意見を異にしていることは、私たちがすでに第三章において見たとおりである。その違いが、実は、二人の生き方、つまり行為の原則の違いであり、脱獄亡命という、いま問題になっている行

為についての意見の相違も、そこに源を発していることを、ソクラテスは見通している。だから、この基本的な点についてクリトンの原則を論駁し、代りにソクラテスの原則を認めさせれば、クリトンを説得できると、ソクラテスは踏んでいるのである。

そうだとすれば、ある意味で、ソクラテスはここですでにクリトンの言論の論駁を目論んでおり、初めから自分の言論の正しさを証明することを意図しているのだとも言えるだろう。とすると、「きみと一緒に考察してみたいのだ」(46d4－5)というソクラテスの言葉は、そのような意図を衣の下に隠して偽りを言っていることになるのだろうか。おそらく、そうではない。説得も論駁も、やってみなければ分からない。ソクラテスは本気で、クリトンと一緒に、問題を考察し、探究するつもりなのである。それが結果的に、クリトンの言論の論駁になり、ソクラテスの言論の論証になることは、十分ありうる。しかし、そうなるかならないかを明らかにするためにこそ、考察が必要なのである。いや、むしろ、ソクラテスにとっては、だれが説得に成功し、だれが論駁されるかは、初めから全然問題ではない、と言わなければならない。問題は、二人のどちらが勝つか負けるかではなくて、二人の行為を正しくみちびく言論を、二人が共同して――しかも生命(いのち)をかけて――発見することができるかどうかなのだから。私たちは、こんなところで、ソクラテスの誠実さを疑う必要はない。

さて、ソクラテスは、行為の原則に関わる言論を考察しようとしている。かれがいま意図していることは、考察の出発点としての足掛かりを、ここでしっかりと定めておくことである。かれは、「人々の意見」についての言論を、クリトンに対して三回も繰り返して、念を入れて確認しようとしている(46c8－d2, d7－e1, 47a2－4)。表現は少しずつ変えているが、内容は同一のことであり、ただ誤解がないように同じことを別の形で言い直しているのである。

この言論の内容そのものは、一見したところでは、さほど重大なものとは思えない。世間の人たちが考え、あれこれ批評する意見のなかには、傾聴すべき指摘もあれば、取るに足らない意見もある、というだけのことなら、いわば当たり前のことであり、平凡な真理にすぎない。この言論自体は、行為の原則を言い表す基本的言論と呼ぶほどのものではなさそうである。三べんも繰り返して確かめるだけの意味が、ここにあるとは思えない。だが、この言論は、議論の出発点として大きな意味を持つ。この言論は行為の大原則というよりは、いわば中原則といったものだが、ソクラテスは、これに続くクリトンとの議論で、この言論を足掛かりとし、ここからその根拠への道を遡り、結局、行為の大原則ともいうべき言論に到達する。（第八節の、「生きがい」について、および、「よく生きる」ことについての結論が、それである。）

ソクラテスの念入りな確認のもう一つの意図は、おそらく、あるいくつかの言論が同一不変であることを確認することにある。人々の意見についてのこの言論は、以前にも、つねに言われてきた言論であるが、それは、いまソクラテスがこのような境遇に陥ったことによって、何らかの変化をこうむるのか。そしてもはやそのままでは成立しなくなってしまったのか。それとも、この言論の正しさは、ソクラテスという人間が身に受ける運や不運とは独立であって、同じ言論が、少しの変化を受けることもなく成立しているのか、とソクラテスは問う。かれはここで、言論というものの厳然としたあり方に、クリトンの注意を向けようとしているように見える。（同様の確認は、48a10－b4にも見られる。）

クリトンの素直な同意　さてソクラテスは、クリトンに、「人々の意見については、そのすべてを気にするべきで

はなく、そのあるものは尊重すべきであるが、あるものは尊重すべきではない」という言論は今もなお正しいかと問い、クリトンは「正しい」と答える。そしてここから対話がはじまり、考察が進行する。クリトンの、この初めの答えは、私たち読者から見ると、あまりにも素直で無造作すぎるようにも思われる。というのは、この言論を認めてしまうと、その後の議論がすべてソクラテスの思いどおりに進んでしまう恐れがあるのに、クリトンはそれに気が付かないのだろうかと、他人事ながら心配になるからである。しかも、この言論を正しいと認めることは、クリトンの前の意見と矛盾することにならないだろうか。かれは前に、世間の多くの人々の思わくを無批判に恐れていたように見える。それに対してこの言論は、人々の思わくには、恐れるべきものと恐れるべきでないものがあると言っている。クリトンはこの言論を受け入れて良かったのだろうか。

クリトンがこの言論を素直に肯定したのは、一つには、これが原則的な言論であったからだと思われる。というのは、このような原則的な言論を、このように単純な形で問われれば、だれだって真理であると認めないわけにはいかないだろう。クリトンも、この言論だけを独立に見れば、それはそれで正しいと答えるほかはなかったと思われる。

それでは、この言論は、クリトンの立場と矛盾しているだろうか。それを、かれはただ気付かなかっただけなのだろうか。しかし、必ずしもそうとも言えないのではなかろうか。というのは、たしかにクリトンは世間の多数の人々の思わくを気にしていたが、そうだからといって、かれはすべての人々の思わくを気にしていたわけではなくて、ただ多数の人々のそれだけを恐れていたのかもしれない。だとすれば、クリトンの立場は、この言論と矛盾しない。クリトンの立場とソクラテスの言論との対立は、議論がさらに進んだ段階で明らかになることであって、いまの段階では二人の立場はまだ一致しているのだとも考えられるのである。

あるいはさらに、この考え方も厳密には当たっていないかもしれない。というのは、クリトンの立場といっても、その全体が初めから明確な立場として――つまり言論に表現されて――あったかどうか、疑わしいとも言えるからである。ソクラテスの方は、いつも言論について自覚的だったから、少くとも基本的なところでは、明確であったと言えるだろう。しかしクリトンが自分の論理をいつも十分に明確に自覚していたとは考えられない。とすれば、二人の最終的な主張が反対であるからにはどこかに対立点があるにちがいないにしても、それがどこにあるとか無いとかは初めからは言えないことになる。対立の有無は、対話のそれぞれの段階で、そのつど明らかになる。そのつど意見が一致すれば、そこにはもともと対立が無かったか、あるいはそのとき解消したかのどちらかだろう。説得が目的であれば、それはどちらでもよくて、意見の一致が実現しさえすればよい。クリトンが自分の立場にこだわらず、途中で考えを改めたとしても、少しも構わない。かれはそのつど、思ったとおりを答えればよいのである。問題は、勝ち負けではなくて、二人にとって正しい言論を見つけ出すことなのだから。実際にはクリトンは、対話の最初から最後まで、ソクラテスの推論にそのつど同意を重ね、結局、ソクラテスによって完全に説得されることになる。いまのクリトンの答えは、その探求の第一歩である。

ソクラテスが次ぎにクリトンに同意を求めるのは、「人々の意見のうち、役に立つものは尊重すべきであり、役に立たないものは尊重すべきではないのではないか」(47a7)という論点である。クリトンは、これにも同意する。この問いは、さきの言論に新たな論点を付け加えて問うたものとも取れるが、むしろ、「人々の意見のうち、あるものを尊重すべきであるのは、それがわれわれの役に立つからであり、あるものを尊重すべきでないのは、それが役に立たないからである」という意味であって、先の言論の理由ないしは根拠を明らかにしたものと取るべきだろう。「役に立つ」

か「役に立たない」かとは、そのものが私たちにとって「よい」ものか「悪い」ものかということであり、私たちの行為の目的にかかわっていく。ソクラテスはこうして、クリトンを、行為の原則の認識へ導いて行くのである。

その次のソクラテスの問いは、「役に立つのは、思慮のある人たちの意見であり、役に立たないのは、思慮のない人たちのそれではないか」(47a10－11)というものである。クリトンは、その通りだと答える。こちらの問いは、行為の根拠や理由を述べようとしたものではない。ソクラテスの意図は、「よい」ものを手に入れるか「悪い」ものを手に入れるかが、私たちの「思慮」にかかわること、言い換えれば「知る」ことにかかわるという論点を確認することにあると思われる。(ここで私たちは、ソクラテスが、前に、「大衆というものは、人を思慮ある者にすることも、思慮のない者にすることもできないのだから、最大の悪いことも最大の善いことも、もたらす力がない」(44d6－10)と言っていたことを思い出す。)そしてこれが確認されれば、このあとの議論によって明らかにされるように、どんな事柄についても、思慮のある人――つまり、たとえば、専門的知識をもっている人――は少数であり、思慮をもたない人――例えば、しろうと――のほうが多数であるのだから、クリトンの、世間の多数の人たちの評判を気に掛け、その意見を行動の基準にする考え方は論駁されることになる。

第七節　47a13－47d6

第八節　47d7－48b10

体育の練習の場合　ここでソクラテスは、体育の練習をしている人の場合を例として持ち出す。体育というのは、陸上競技でも、相撲でも、ボディビルディングでもよい。とにかくそのために身体を鍛えている人がいるとする。そ

の人は、自分の練習のやり方や飲食物の取り方について、あらゆる人間の賞賛と非難に注意を払うわけではなく、ただ体育のコーチや医術の心得のある人の意見にだけ耳を傾けるだろう。すなわち、ただ一人であっても指導者であり知識のある人の意見に従って行動すべきであり、それ以外の人々がいくら多数であってもこれに従ってはならない。なぜなら、思慮のある一人の人の言うことを聞かず、多数の思慮のない人々の評判の方を大事にするなら、いつかきっと身体を駄目にしてしまうことになるからだ。

ソクラテスがここで体育の練習をする者の例を持ち出したのは、まず、このすぐ前の抽象的な議論をもっと具体的な分かりやすい形に言い直して、その内容を明確なものにするためである。ソクラテスはすでに、「人々の意見というものは、そのすべてを気にすべきではなく、ある人々の意見は重んずべきだが、ある人々の意見は重んずべきではない」こと、「人々の意見のうち、役に立つ意見を尊重すべきであり、役に立たない意見は尊重すべきでない」こと、そして「思慮のある人たちの意見が役に立ち、思慮のない人たちの意見は役に立たない」ということを、クリトンに同意させた。たしかに言葉の上では、これらのことを否定する者はだれもいないだろう。しかしこれらの言い方は抽象的である。対話の相手がそれをどういう意味で受け取り、どこまで理解して受け入れているかは、具体的な例で確認してみなければ分からない。ソクラテスは、クリトンとの議論が机上の空論にならないように、現実的な肉付けを加えようとしているのだと考えられる。

しかし、ソクラテスが体育の練習をする者の例を持ち出したのには、もう一つの目的があったと見られる。それは、上に言われた言論について、その根拠を明らかにすることである。つまり、「思慮のある人の意見は役に立ち、思慮のない人の意見は役に立たない」という言論自体を確認するだけでなく、なぜそう言えるのか、なぜそう言わなければ

ならないのか、その根拠を明確にするためであったと思われる。というのは、ソクラテスは、なぜ思慮のない人たちの意見に従ってはならないかを問題にしており、これに対して、そういうことをすると何らかの損害を受けるからであり（47c1－4）、その損害とは身体を壊すことであり（47c5－7）、身体が駄目になったら生きがいのある生きかたができなくなるからだ（47e3－5）、と答えているからである。これは上に言われた言論に対する根拠の言論になっている。

この根拠の言論の、そのまた根拠の言論は、もはや語られない。生きがいのある生きかたができなくなってはどうして悪いのかという問いは問われない。その必要はないからである。よい生きかたができなくなるとしたら、それだけでもう、よい生きかたとは言えなくなるからである。幸福な生活ができないからといってどうして不幸なのか、と問う人はいない。これはすでに、万人が認める根拠である。

ところで、身体を壊したらよい生き方ができないという議論は身体障害者や病人や老人を差別する議論だという解釈があるとすれば、それは誤解である。上の議論は、身体障害者はよい生き方ができないと言っているのではない。ヘレン・ケラー女史や物理学者のホーキング教授の例を引くまでもなく、身体障害者でありながら立派なすぐれた生き方をしている人はいくらでもいる。上の議論が言っているのは、健康な人にとっても病気の人にとっても、身体障害者にとっても健常者にとっても、差別なく、等しく、健康が良い生活を支え、病気やけががそれを損なうと言っているにすぎない。また、よい生きかたをするためには身体がすべてだと言っているわけではないし、身体だけで十分だと言っているのでもない。そのことは、これに続く議論を見れば分かるだろう。

正義の行為によって益され、不正な行為によって損なわれるあのもの　ソクラテスは体育の例を取り上げ、身体の健康と病気をもたらす練習方法について、専門家の意見に従わなければならないと論じたが、かれはさらに、正義と不正、美しいことと醜いこと、よいことと悪いことなどについてもそれは同じことで、私たちは無思慮な多数の人々の言うことを気にしてはいけないと言う。なぜなら、さもないと、私たちは「正義の行為によって益され、不正な行為によって損なわれる、あのもの」を虐待し、破滅させることになるからである。そしてそれが破壊されたとき、私たちはもはやよく生きることができないからである。

まず考えられることは、ソクラテスはここで「精神」ないしは「心」のことを言っているのだろうということである。身体を壊したらよい生活は望めないが、精神を駄目にした場合にはよい生きかたをすることはいっそう困難になる、とかれは言っていると思われる。ソクラテスは「精神」とか「心」とかいった言葉を、ここでは使っていない。しかしかれは、「正義［の行為］によって向上し、不正［な行為］によって滅びるあのもの」（47d4－6）があると主張し、しかもそれは「身体よりももっと貴重なもの」（47e7－48a4）だと述べている。

「精神」ないしは「心」が堕落したとき、よい生活ができなくなるということ、いいかえれば幸福に生きることができなくなるということは、おそらく、だれもが簡単に納得することではない。なぜなら、正義を無視し不正を行っていながら（つまり堕落した精神を持ちながら）幸福な生活を送っている人も現実には存在する、と考える人も多いからである。しかしクリトンはそのことを素直に納得し、ソクラテスはクリトンを説得することに成功している。

正義を尊重し、自分が不正をすることを嫌う人にとっては、ソクラテスの議論は分かりやすい。クリトンもおそらくそういう人の一人だった。というのは、そういう人ならば、不正なことばかりする人間になるくらいなら死んだ方

がましだと思うからである。私たちの生きている世界でも、社会的な地位にある人や、人の上に立つ人のなかに、自分のわがままや怠慢によっていつも他人に迷惑を掛けているのに、それに気付かないといった人も多い。そういう人は周囲の人たちから居ない方がましだと思われるような人である。私たちはそういう人にはなりたくないし、そういう地位にもつきたくないと思う。そんな生活では、何のために生きているか分からないと思う。精神や心が駄目になったら生きていく価値がないとは、そういうことだろう。

だが、ソクラテスの言っていることがもしそういうことだとしたら、私たちは「精神」とか「心」とか言う代りに、同じことを「人柄」あるいは「人格」または「人間」という言葉で表現してもよいだろう。人格が破綻し、人間が駄目になったら生きていく価値がない、と言ったほうが、事柄は分かりやすいように思われる。しかもソクラテスはそのものを、「正義の行為によって益され、不正な行為によって損なわれるあのもの」と呼んだが、まさに、私たちは不正な行為を繰り返すことによって不正な人間になり、いつも正義を尊重して行為することによって、正義を尊重する人柄が保たれるのである。

あるいは、ソクラテスが「正義の行為によって益され、不正な行為によって損なわれるあのもの」という言い方をしたとき、彼が考えていたのは心や精神や人柄や人間と言うよりはむしろ、私たちの「生きかた」のようなものだったのかもしれない。というのは、私たちの生きかたも、ある性格の行為によってつくりあげられ、それと反対の性格の行為によって破壊されるからである。私たちが正義に従った生きかたを望んだとしよう。そのとき、その生きかたをつくりあげるのは正義の行為であり、それを台無しにするのは不正な行為である。人間はだれでも、自分は一生をこんなふうに生きたいという望みをもっている。それがその人の生きかたである。それは自分の一生の仕事であった

り、あるいは人生の目標、あるいは自分が願望する幸福であったりするだろう。場合によっては、それを言葉ではっきりと自覚してはいないかもしれないし、また年齢とともに考え方が変化することもある。しかし私たちはいつも何らかの生きかたをもっていて、毎日の生活のなかでその生きかたを実現しようとして生きているのである。そしてその生きかたが実現できれば、私たちはそれぞれ自分なりに幸福であると思い、実現できなければ不幸だと感じる。だから、生きかたとは生きがいのことであると言ってもいい。それが破壊されれば生きている価値がなくなるのである。

こう考えれば、「それは身体よりも貴重なものだ」というソクラテスの言葉もいちばんよく理解できるように思われる。というのは、ソクラテスはさっき、身体を壊したら幸福な生活ができないと言い、そしていまは、「あのもの」が破壊されたら幸福な生活はできないと言っているけれども、これら二つのことは同じ重さで言われているのではない。なぜなら、「身体」の健康が幸福を作り出すのと、われわれの「生きかた」が幸福を作り出すのとでは、その作り出しかたが同じではないと思われるからである。私たちの望む生きかたは、それが実現すればそれがそのまま幸福であると言ってよいが、身体の健康のほうは、それ自体がそのまま幸福なのではなくて、いわば幸福の必要条件、あるいは幸福な生きかたを実現する手段とでもいうべきものである。

（ただし、ソクラテスが言う「正義の行為によって益され、不正な行為によって損なわれるあのもの」が何をさすかという問題が残るからである。たとえば、もしかりに私たちのだれかが「不正な生きかた」に、正義や不正がどんな関係をもつのかという問題が、これですべて解決するわけではない。私たちの「生きかた」こそ幸福な生きかたであると考え、そういう生きかたを望んだとしたら、それはソクラテスが言うのとは逆に「不正な行為によって益され、正義の行為によって損なわれる」ものとなるかもしれない。ただし、「不正に生きる」ことが一つの生き方になるかど

うか、言い換えれば、そういう生きかたを人生の目標にするとか願望するとかいうことがはたして自己矛盾なしに成り立つかどうかは、大いに疑問である。この問題はおそらく、ソクラテスの「言論に従う」生き方と関係があり、『クリトン』の全体にかかわる大きい問題であるように思われる。）

多数者の意見に従ってはならない　さて、ここまでの議論によってソクラテスは、多数者がどう思うか、どう言うかを気にしてはならないことを、クリトンに対して明らかにしてみせた。この論点は一見したところ些細な論点のように見えて、なかなか容易ならぬ内容をもっている。というのは、この言論は、いうまでもなく、ソクラテスが脱獄亡命すべきか否かにかかわっており、さらにクリトンと多数者の倫理の是非にかかわっており、そしてまたすべての人々の行為の根拠にかかわっているからである。

そもそもクリトンがなぜ世間の多数の人々の思わくを気にしたかと言えば、一つにはかれが友人よりも金銭を大事にしたと思われたくないという（私たちからみても正当な）理由があったからである。しかし、もう一つの（かれ自身は自覚していなかったかもしれない）重要な原因として、クリトン自身が多数者と同じ倫理を共有していたという事実がある。つまりかれは多数者と同じ倫理にもとづいて、ソクラテスの（何もしないで死刑を待つという）行為を「正しくない」（45c5）と非難し、「不幸」（46a3）であるのみならず「恥辱」（46a3）であると言ったのである。ソクラテスはかれらの考え方のつながりを見抜いていたからこそ、クリトンに、まず、多数者に従ってはならないことを分からせようとしたのである。だからソクラテスの批判は、まず多数者に向けられているけれども、同時にその倫理の内容にも向けられている。すなわち、「私たちがいままさに論議している、正しいことと不正なこと、美しいことと醜

いこと、よいことと悪いことについて」（47c9－10）多数者の意見に従ってはいけないと、ソクラテスは論じた。まさしくこれらの事柄についての考えが、クリトンのソクラテスの行為に対する非難をかたちづくっていたからであり、その大本（おおもと）の倫理にほかならなかったからである。（原文のギリシャ語を見ると、クリトンの非難の言葉のうち、「正しくない」は正義と不正の問題につながり、「不幸」はよいことと悪いこと、「恥辱」は美しいことと醜いことに関わる問題として考えられていることがよく分かる。）

クリトンと多数者に共通な倫理の内容とは何か。かれらは「正しいことと不正なこと、美しいことと醜いこと、よいことと悪いこと」について、どう考えるのか。それはクリトンのソクラテスに対する非難の内容から明らかである。すなわち、他人から不正なことをされること――そこから自分の身を守ることができず、またそれに仕返しすることもできないこと――これが「悪いこと（不幸なこと）」であり、「醜いこと（恥ずかしいこと）」であるという倫理である。これについては、私たちはすでに第五節で見た。ソクラテスはこれに対して、まもなく、かれ自身の倫理を主張することになる。それは、自分が不正なことをすることこそ、醜いこと（恥ずかしいこと）であり、悪いこと（不幸なこと）であるという主張である。

しかし私たちはそれを見る前に、ソクラテスが、「正しいことと不正なこと、美しいことと醜いこと、よいことと悪いこと」について、なぜ多数者の意見に従ってはならないと言ったのかを、もう一度ふり返ってみよう。というのは、ソクラテスのこの考えは、私たちにとってけっして自明ではないからである。ソクラテスが始めに体育での演習を例に用いて論じていたことはすでに見た。かれはこの議論を、正義と不正、美と醜、よいことと悪いことに関して、類比的に適用して議論していた。しかしこの類比を、私たちは理解できるだろうか。

ソクラテスの議論の基礎にある考えは、よい身体をつくるための練習の仕方や食事の取り方について、それを知っている人と知らない人がおり、医者と体育家がそれを知っていて多数者は知らないというものである。私たちはこの考えを受け入れざるをえないし、また受け入れることができる。しかし、ソクラテスは、正義の人柄をつくるのは正義にかなった行為であり、不正な人間をつくるのは不正な行為であると考え、しかも、(一)何が正義にかなった行為で何が不正な行為であるかについて、知っている人と知らない人がおり、(二)それを知っているのは少数の人だけであり、多数の人はそれを知らないと考えている。ソクラテスのこの考えは、私たちの多数の者にとって、これまであまり考えたことのなかった考え方であるように思われる。

というのは、私たちの多くはむしろこう考えるからである――「どういうことが正義でありどういうことが不正であるかについては、だれでも知っている。ところが人々の中には知っていて不正なことをする人間と、不正と知っていればしない人間とがいる。この違いが、不正な人間と正しい人間の違いなのだ」と。

ソクラテスは、私たちのこの考えのうち、「不正と知っていればしない人間がいる」というのは認めるだろう。しかし、「知っていて不正をする人間がいる」ということは認めない。というのは、ソクラテスはこう考えるからである――「もしそういう人間がいるとして、その人がなぜ不正なことをするかといえば、それが利益になると考えるからだろう。ところが、本当は、不正によってその人の人間が駄目になるのである（cp.47d4－6, e7, 49b4－6）。このことを、不正な人は知らないのである」と。ソクラテスのこの考え方がもし正しいとすれば、世の中に不正なことをする人が多数いればいるだけ、それだけ多数の人が不正と正義について知らないのだということになるだろう。

しかも、知らないで不正をする人も、じつは多いのである。どういうことが正義でどういうことが不正かという一

般的な知識は持っていても、いま自分がしていることが不正な行為であるということに気が付かないということが、いくらでもあるからである。

こうしてみると、正義にかなった行為をおこない不正な行為をしないということは、誰にでも思うが儘に容易にできるといったことでは決してないことが分かる。そしてその原因は、正義の行為と不正な行為について知ることが、誰にでも容易にできることではないというところにある。このことは正義と不正についてだけでなく、本当の美醜についても、本当の幸福と不幸についても同じだろう。ギリシャ人たちが諺に言ったように「優れたものは困難なもの」だからであり、多数の人々が到達することは不可能であることを、私たちは事実として認めなければならない。そうでなければ、私たちが何かについて努力するということが意味を失うだろう。

ところで、私たちにとって気になるもう一つのことは、ソクラテスが多数者に対比させて言っている「正義と不正についてよく知っているただ一人のひと、すなわち真理」（48a6－7）とは誰のことか、ということである。ソクラテスは、自分こそがその人間だと言っているわけではないだろう。かれはいつも、そういうことについては無知であると告白していたからだ（『ソクラテスの弁明』21d, 23b など参照）。しかしまた、かれは「神」のことを言おうとしているのでもないだろう。たしかにそのような「一人」は神よりほかにはいないであろうが、ここで特に「神」の名を持ち出すことにあまり意味があるとは思えない。むしろ私たちは、ソクラテスが前に「自分はいつも言論に従う」と言っていたことを思い出すべきだろう。かれは、「自分という人間は、自分のうちにある他の何ものにも従わないで、つねにただ、そのつど自分で論理をたどってみて最善であることが明らかになった言論にのみ従う」と言っていた。ここからすれば、「正義と不正についてよく知っているただ一人のひと、すなわち真理」とは「言論」のことだというのが

一つの答えになるだろう。それならやはりソクラテス自身のことになるではないかと言われるかもしれない。言論に従うことは、ある意味ではソクラテス自身に従うことだからである。しかしそうだとしても、(あるいは、そうだとすれば、)かれはソクラテス個人に従うのではなく、万人に共通な言論に従っていることになる。ソクラテスがここで本当に言いたかったのは、誰が「真理」かではなく、むしろ、正義と不正についての真なる言論が存在しうるということであり、またそれを知らなければならないということであったと思われる。

行為の第一原則：よく生きる　ソクラテスは、多数の人々がどう思うかを気にしてはならないこと、そしてなぜそうしてはならないかということを、一応、クリトンに説明し終わった。この作業は、(一)人々の意見をどう扱うべきかという基本的言論の確認であり、(二)また、その言論の根拠の探求であり、(三)そして同時に、クリトンの考えに対する論駁であった。これにつづいてソクラテスは、再び、行為の原則に関わる基本的言論を確認する仕事に立ち戻る。そして、いわば「行為の第一原則」ともいうべき言論を提出する。すなわち、「いちばん大切にしなければならないのは、生きることではなくて、よく生きることである」(48b5－6)という言論である。

ソクラテスのこの言葉は、かれの言葉の中でも最も有名な言葉だといってよいかもしれない。この言葉が倫理的な文章の中で引用されているのを、私たちはよく見かける。ところが、有名な言葉にありがちなことだが、その多くの場合が誤解にもとづく引用なのである。というのは、この言葉は――少くともこの言葉だけでは――「道徳的に正しく生きることが大切だ」とは言っていないのに、たいていの場合そう受け取られているからである。ソクラテスの言葉の意味は、むしろ、「私たちが本当に望んでいることは、生命を長らえることではなくて、幸福で生きがいのある生を

生きることである」という意味なのである。

これがソクラテスの言葉の本当の意味であることは、一つには、「よい」に当たるギリシャ語の一般的な用法から、また特にプラトンとアリストテレスの用法から、おそらく確定的に証明できる。しかしもう一つには、この『クリトン』という作品の内部からでも、私たちがこの前後の議論の筋道を注意深くたどって見ることによって、ほとんど確実に見て取ることができる。

というのは、まず、この直ぐ前に言われていた体育の練習の話を思い起こそう。そこでの話題は、多数者の意見に惑わされてはいけないということだったが、なぜそうしてはいけないかという根拠も同時に明らかにされていた。すなわちそれは、それによって身体を壊すからであり、さらに、身体を壊せば生きがいのある生を生きることができなくなるからであった。そしてさらに、正義と不正、美と醜、善と悪に関わる事柄において多数者に従ってはならない理由についても、同じく、生きがいのある生を生きられなくなるからだと言われていた。つまり、そこで最終的な根拠とされたのは「生きがいのある生を生きること」がなによりも大切だということであった。「よく生きる」という第一原則はまさしくこうして導き出されたのである。ソクラテスはここから後の議論を、この第一原則を基礎に据え、これを出発点にして組み立てていく。そこを見れば、体育の練習の話も多数者の言うことを気にしてはいけないという言論も、じつは、そこからそれらの根拠をたずねて遡り、この大原則を導き出すために取り上げられた議論であったことが分かる。

「生きがいのある生を生きる」ことが行為の究極の根拠になりうるのは、前にも述べたようにこれが万人の認める究極的な価値だからである。「生きがいのある生」とは、生きていてよかった、生きたかいがあったと、後になって言え

るような、そういう生のことだろう。つまり、「幸福な生」のことであり、これが万人の求める生である。どういう生きかたが生きがいがあり、幸福であるかについては人によって意見が異なるけれども、幸福な生を求めるという点では一致している。ソクラテスはこれを第一原則として立てたのである。だからかれは、いわばあたりまえの真理を語っているのであって、道徳的なお説教をしているのではない。かれは「よく」生きることが大切だと言っているのであって、「正しく」生きることが大切だと言っているのではないのである。

ソクラテスは、私たちと全く同様に、幸福に生きることをいちばん大切にした。その点で、かれは全くの凡人だった。ここのところを誤解すると、私たちはソクラテスを誤解し、かれを哲人にまつりあげ、そしてかれに反発することになる。「ソクラテスはたしかに正義の人だった。立派な人だった。だがかれは、われわれ凡人とは違う人間なのだ。たしかにわれわれも、かれのように正しく立派に生きられたらよいと思う。しかしそれは理想であって、現実ではない。ソクラテスの理想は現実のわれわれには関係がない。われわれはソクラテスのように強くはないからだ」ということになる。つまり私たちは、ソクラテスの「正義」に反発して、私たちの「幸福」を求めようと考える。だがこれは誤解である。ソクラテスが生きることの根本原理としたのは「幸福」であって「正義」ではなかった。（ただし、これは、ソクラテスは「正義」を大切にしなかったと言っているのではない。かれは正義を大切にした。しかし、それは幸福に生きることがいちばん大切だからであり、正義にしたがって生きることがそれに一致すると考えたからである。このことについてはすぐ後で考察しよう。）

ここでもう一つ、私たちが確認しておかなければならないことがある。それは、ソクラテスがいちばん大切にしなければならないと言っているのは「よく生きる」ことであって、「よく死ぬ」ことではないということである。という

のは、これもたいへんしばしば誤解されることだからだ。ソクラテスは、脱獄し亡命するという行為を選ばず、そのまま牢獄にとどまるという行為を選んだ。これは多くの人の目から見れば、生きることを放棄し、死を選ぶことを意味した。いうまでもなく、ソクラテスは死刑の判決を受け、その執行の日も迫っていたからである。（クリトンも、そのように考えた一人である。かれはソクラテスが自ら生きることをあきらめたと思ったからこそ、ソクラテスの心得ちがいを責め、ソクラテスが「救われる」（44b6, 45b7）ように説得を試みたのである。）しかし、それは誤解である。ソクラテスは生きることのかわりに死ぬことを選んだのではない。かれは、不正な行為をするかわりに正義にしたがって行為することを選んだのだ。そして、正義にしたがって行為することは生きることなのである。人間の場合、行為することが生きることにほかならない。たしかに、多くの人々が言うとおり、ソクラテスは長く生きることを選ばなかった。しかしだからといって、短く生きることを選んだのではなく、また早く死のうとしたわけでもなかった。かれは、自分が生きている時間が長いか短いかを考えるよりも、自分が生きている時間に生きがいのある充実した生を生きようとしたのである（『ゴルギアス』512e 参照）。（もしかりに、私たちが不治の病の宣告を受けたなら、同じように考えるのではないだろうか。）「いちばん大切にしなければならないのは、生きることではなくて、よく生きることである」というかれの言葉は、生きることを軽視しているどころか、じつは、なににもまして生きることを尊重しているのである。

だがしかし――と、ここに、まだ疑問が残るかもしれない――もしソクラテスが、なににもまして生きることを大切にしたのなら、なぜかれは死んだのだろうか。というのは、かれが死んだことはまぎれもない事実だからだ。生きていればこそよく生きることもできようが、死んでしまってはよく生きることさえできなくなるではないか。とにも

かくにも生きていることが、よく生きるための必要条件なのである。だいたい、ソクラテスの「生きることではなくて、よく生きることが大切だ」という考えそのものが、少し欲張りすぎではないのか。人間には細く長くという生き方だってあってよいだろう。正義にしたがって生きるなどといった大それたことを望まず、つつましく生きていくのも人間の生きかたではないか。たとえば最近は、「生命の質」(Quality of Life)の重視などということもよく言われるけれども、老人や病人と一緒に生活してみると、ほとんどただ生きているだけでも貴いと思うようになる。ソクラテスの場合も、かれの故郷のアテネで生きていくことはできなくなるにしても、クリトンの知り合いのいるほかの都市で静かに余生を送ることで満足できたのではないかとも思われる。

この疑問の言うところは、大部分はもっともだと思われる。たしかに、よく生きるためには、生きていなければならない。(ただし、生きていなければならないのは、それがよく生きるために必要だからであって、十分だからではない。)だがおそらく、ソクラテスは、そういうことはよく知っていた。しかも、つつましく生きてもいた。(ソクラテスの「正義」は、おそらく、けっして大それたものではなく、私たちの日常の生をつくりあげているような何かだった。)その上でかれは、私たちとは違うところに目を向けていたのである。おそらく、かれの目には、かれの脱獄亡命という行為は、かれのそれまでの人生のすべてを否定し、無にしてしまう行為として映ったのであり、脱獄亡命後のかれの人生は、生きれば生きるほど自分を不幸にするような生活になることが明らかだったのである。ソクラテスのこの考えについては、また後で、『クリトン』の終り近く(第十五・十六節)になってから再び検討しよう。(ソクラテスの置かれた状況と同じ状況に私たちが置かれることを想像することは、かなり難しい。この点では、ソクラテスの一生がかなり特異な生きかただったことを認めないわけにはいかない。私たちの場合、生きつづければ生きつづけ

るほど自分が不幸になるという状況は、滅多には起こらない。あえて想定すれば、私たちが、自分が生きつづけるかぎりますます多くの人にますます大きな苦しみを与える、極悪人あるいは独裁者としてしか生きられないような場合だろうか。私たちはそういう自分を生かしておくべきだとは思わないだろう。生物的に生きていることが、自分の行為によって意味を無くすということが、起こらないとは言い切れない。私たちの場合、生物として生きていることは、人間として生きるための手段であって目的ではないからである。もっと日常的な例を想定すると、たとえば私たちが重病の床についており、自分が生きれば生きるほど身近な人々を不幸にすると考えたら、私たちはおそらく生き続けることが大切だとは思えなくなるなるだろう。もっともこの場合、その考え自体は間違っていると言わなければならないけれども。）

行為の第二原則：正義（ただ）しく生きる　ソクラテスはつぎに、もう一つの言論を確認することを、クリトンに求める。それは、すぐ前の言論のなかで言われていた「よく生きる」という事柄に関わるもので、つぎのように言われている。「このとき、「よく」ということは、「美しく」ということと同じであり、さらに「正しく」ということと同じである。」(48b8)クリトンは、前の言論についてと同様、この言論についても、これが行為の原則として不動であることを認める。

この言論は、一見したところでは、前の言論の中で用いられていた言葉についての補足的な説明のように見え、ことさら確認を必要とする言論のようには見えないかもしれない。しかし、じつは、さきほどの言論を行為の第一の大原則とすれば、この言論は、行為の第二の大原則ともいうべき、重要な、独立した言論なのである。

というのは、まず、この言論が言っていることの一つは、「ひとは正しく生きるとき、そしてそのときにのみ、よく生きることができる」ということ、言い換えれば「ひとは正義にしたがって生きるとき、そしてそのときにのみ、幸福に生きることができる」という言明であり、これは、ある一つの独自な倫理的立場の主張にほかならないからである。というのは、一般的な多数者の立場からは、反対に、「不正をしながら幸福な人間はいくらでもいる」と考えるのが普通であって、上のような考えはむしろ少数者の立場だからである。この点では、さきほどの第一原則が万人の認める真理であったのと対照的に、この第二原則は、ことさらの確認を必要とする、少数派の言論なのである。(その確認を、ソクラテスは、さらに、第九節と第十節のほぼ全体にわたって、くどいほど念入りに行っている。特に、49a－b, 49d－e.)

この言論を行為の第二原則としてあつかうべきもう一つの理由は、この後の議論の運びを見れば分かるように、ソクラテスが、さきほどの言論(第一原則)とこの言論との二つの言論をもとに、それ以後のすべての議論を組み立てていることである。すなわち、かれは、第一原則と第二原則を前提として用い、そこから結論として「正義にしたがうべきである」という原則を導き出し、これをそれ以後のすべての言論の基礎に据える。その主な骨組みは、つぎのような三段論法になっていると見ることができる——

[前提Ⅰ] よく生きることを、いちばん大切にすべきである。

[前提Ⅱ] この場合、「よく」ということと「正しく」ということは同じである。

[結　論] 正しく生きることを、いちばん大切にすべきである。

そして実際、ソクラテスは、ここに結論として得られた「正義」の原則に基づいて当面の問題である脱獄亡命計画実

行の可否を考察しようと、クリトンに提案するのである（48b11－c2）。つまり、これ以後の考察の基礎になる「正義」の原則の源泉は、第一原則と第二原則なのである。

「このとき、「よく」ということは、「美しく」ということと同じであり、さらに「正しく」ということと同じである」（48b8）という言論は、したがって、たとえば「清く、正しく、美しく」といった標語のように、似たような意味の単語を漫然と並べたものではない。また、一般に同じ意味に使われている言葉を並べたものでもない。むしろ、この言論は、一般には三つの異なった事柄であると考えられているものが、じつは一つの事柄であることを主張するものなのだ。そのことは、ここに言われている三つの副詞の後に、省略されていた「生きる」という動詞を補ってみれば明らかになる。つまり、一般には別々の事柄と考えられている、「よく生きる」ことと「美しく生きる」こと「正しく生きる」ことが、じつは一致することを、この言論は主張しているのである。（このことの一部分、すなわち幸福な生と正義の生については、すでに述べた。）

しかしそれでもまだ、私たちには、この三つの言葉が似たような意味の言葉であるように見えるかもしれない。もしそう見えるとしたら、その最大の原因は、多分、私たちがこれらの言葉で言われている事柄について、すなわち「よさ」と「美しさ」と「正しさ」そのものについて、あまり考えてみたことがないというところにある。しかしもう一つの原因は、（いま言ったことと、結局は同じことなのかもしれないが、）私たちの日本語が、ある面ではまだよく整備されていなくて、これらの事柄を言い表わす単語――とくに、漢字――を所有していないことに関係がありそうである。

たとえば、まず、「よく」という語を、私たちは漢字で書き表わすことができない。この語の名詞は、和語では「よ

さ」だが、簡潔な漢語で言いたければ「善」と言うほかはない。(「良」とか、「好」とか呼ぶのは、もちろん無理である。)ところが、日本語で「善」と言ってしまうと、「善悪」とか「善人悪人」とかいうように、多くの場合、道徳的な色合いをもつことになってしまう。(これは儒教かあるいは仏教の影響なのだろうか。)そしてそこから、「正義」と同じようなものだと考えられることになってしまうのである。というのは、もし道徳という規範に合致するものが「善」であるなら、それは、法という規範に合致する「正義」と——規範との合致という点で——似たものに見えてくるのは当然だからである。

私たちの昔からの日常語である「よい」、「よく」、「よさ」などの語が、もっと広い意味と用法をもつ言葉であることは言うまでもない。そのことは、「よい」という日本語には、「善い」の他に、「良い」「好い」「佳い」「嘉い」「能く」などの漢字が当てられることからも分かる。それは、ソクラテスが使ったギリシャ語のagathonやeuと同じく、「幸福な」「価値ある」「有益な」という意味に使える言葉なのである。ところが、「善い」という漢字を使うと、これが途端に道徳的な言葉に変質してしまうのである。(とは言え、他に適当な漢字を探し出すことが難しい以上、私たちはやはりこの「善」という文字を、「幸福」や「利益」の意味に使えるように、いわば無理やり使い馴らしてゆくほかはないのだろう。そこで私たちも、「善」という漢字を「幸福」や「利益」を意味する言葉として使用することにしよう。)

「よく」と「正しく」が同じ意味をもつように見える原因の一端は、「正しさ」という語のほうにもある。というのは、この言葉と文字は、「正義」に限定されない広い意味と用法をもち、たとえば「正しい姿勢」「正しい答え」のようにも使われる。そしてこれらを「よい姿勢」とか「よい答え」とか言い直しても、意味は同じようなものだと思われるからである。(「ただしい」も「正」も、元来、「まっすぐ」なことを表わすという。)(したがって、私たちが「正

しい」という言葉を「正義」の意味に限定して用いようとするなら、文字の上でだけの話だが、「正義しく」とでも書き表す工夫が必要になるだろう。――以後の表記で、私たちも試みにこの工夫を取り入れてみよう。）

しかし、言うまでもなく、言葉の表記は枝葉のことで、肝心の問題は言葉の用法にある。というのは、ある人が言葉をどう用いるかは、その人の人柄と生きかたに関係することだからである。「善く（＝幸福に）」と「美しく」と「正義しく」とが同じであるかというソクラテスの問いに、クリトンは、同じであると答えた。つまり、これら三つの言葉を、少くとも「生きる」ことにおいては、同じ対象を指し示す言葉として相互に言い換えて用いてよいと答えたのだ。そのときクリトンは、おそらく、思ったとおりを答えたのである。そしてそれは、かれが、正義しいことならするが、不正なことはしない人間であることを示している。つまり、不正なことが自分にとって善いことがありうるとか、不正なことをしても幸福なことがあるとは、考えない人間であることを示している。

幸いにして、この点でクリトンはソクラテスと同じ考えだった。そしてその分だけ、ソクラテスのクリトンに対する説得は容易になったと言えるだろう。なぜなら、残る仕事は、かれらがこれからなそうとしている行為が、正義しいか不正であるかを考察することだけになるからである。そして、もしその行為が正義しければそうすれば善いし、不正であるならやめれば善い（cp.48b11－c2）。

（だが、もし相手がクリトンでなかったら、必ずしもそうはいかない。なぜなら、その相手は、必ずしも「正義しい」行為と「善い（＝幸福な）」行為とが同じであると考えないかもしれない。そうだとしたら、かりにこれ以後の考察で、脱獄亡命という行為が不正であると判明したとしても、相手は、「だからといってなぜ悪い（＝損害になる、不幸になる）のか」と言い返すだけかもしれない。そのときソクラテスは、あらためて、その相手に、「正義しく生きる」とき

にのみ「幸福に生きる」ことができることを納得させるという、大変な仕事をしなければならなくなる。――それが例えばどのような仕事になるかを、プラトンは『ゴルギアス』によって示した。）

なお、この「行為の第二原則」についても（「行為の第一原則」についてと同じく）、ソクラテスがここで唐突に確認を求め、それにクリトンが突然に同意したわけではないことに注意しておくべきだろう。ソクラテスは、もちろん、クリトンがこの言論に同意するであろうことをよく知っていたのである。それは、かれが平生のクリトンの人柄を知っていたから、というばかりではない。この直ぐ前の対話の中でクリトンが同意していた言葉にも、クリトンの考え方は明らかに現われているからである。というのも、かれはそこで「正義によって裨益され、不正によって損壊される、あるもの」があることを認め（47d3－6）、「そのものは身体よりも貴重なもの」（48a3－4）であり、「それが破壊されたならば生きるかいがなくなる」（47e6－7）ことを認めていたからである。そしてこのことは、とりもなおさず、正義しく生きることなしには幸福に生きることができないという考え方にほかならないからである。クリトンは、この基本的な言論についてはソクラテスと同じ考えだったが、おそらく、「正義」とは何であるか、その中味について、ソクラテスと同じ認識をもっていなかったのである。

［内　容　目　次］

序　章　朝早くクリトンが牢獄のソクラテスを訪ねる　（一～二節）
〈ソクラテスの処刑の日が迫っていること〉
〈ソクラテスが平静な様子であること〉
〈夢の知らせ〉
〈ソクラテスを脱獄亡命させるクリトンたちの計画〉
I　クリトンのソクラテスに対する説得　（三～五節）
〈生命を救うための説得〉
〈クリトンとソクラテスの意見の違い（その一）〉
〈クリトンとソクラテスの意見の違い（その二）〉
〈救出の実行手段について〉
〈クリトンの倫理〉
II　ソクラテスのクリトンに対する説得　（六～十七節）
II－1　行為の原則について　（六～八節）
〈ソクラテスは言論に従うこと〉
〈行為の原則にかかわる基本的言論〉

〈人々の意見についての言論〉
〈クリトンの素直な同意〉
〈体育の練習の場合〉
〈正義の行為によって益され、不正な行為によって損なわれるあのもの〉
〈多数者の意見に従ってはならない〉
〈行為の第一原則：よく生きる〉
〈行為の第二原則：正義(ただ)しく生きる〉

［以下　『クリトン』を読む（下）］
II―2　不正について　（九～十節）
II―3　国法に従わないことの不正　（十一～十三節）
II―4　ソクラテスの場合の不正と不幸　（十四～十五節）
II―5　結び：永遠の不正と不幸　（十六～十七節）